



# 埼玉県立史跡の博物館紀要 第9号

## Contents

旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料 －富山県氷見市朝日貝塚の骨角器－	倉澤麻由子
〈資料紹介〉根岸武香と利仁神社経塚	水口由紀子
小学校社会科第6学年の学習における さきたま史跡の博物館の役割	向井隆盛
埼玉古墳群をめぐる研究者たち	井上尚明

## はじめに

埼玉県には、「さきたま」・「嵐山」の二つの「史跡の博物館」がございます。

「さきたま史跡の博物館」は埼玉古墳群、「嵐山史跡の博物館」は比企城館跡群 菅谷館跡の国指定史跡を擁しています。新たな博物館づくりを目指して、その特徴を活かしながら、様々な事業を展開しております。

本年度も「さきたま史跡の博物館」においては、埼玉古墳群の保存整備のほか、企画展「古墳の終焉と律令時代の幕開け」、テーマ展「新収蔵品展～旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料～」、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共催による最新出土品展「地中からのメッセージ」、「ほるたま展2015」などを開催し、埋蔵文化財の活用をとおして、わかりやすい考古学の情報発信に努めてまいりました。さらに、さきたま体験工房の運営や各種の体験学習事業・小学校での出前授業・さきたま講座などの事業をとおして親しみやすい博物館づくりに努めているところであります。

一方、「嵐山史跡の博物館」では企画展「中世黎明～時代を変えた武士と民衆～」、巡回文化財展「比企のタイプカプセル」、ロビー展などを開催してまいりました。また、企画展関連シンポジウム・歴史講座・文化財めぐりなどの事業を実施し、親しみやすい中世史の情報発信に心がけているところでございます。

本誌は、職員が日ごろの調査研究を踏まえ、自己研鑽を努めた成果を発表したものです。本誌が各地の博物館・図書館等で広く活用され、多くの方々に史跡や考古・歴史資料をご理解いただくための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や執筆にあたり御協力いただいた方々に対し深く感謝を申し上げると共に、今後ともより一層の御支援と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

埼玉県立さきたま史跡の博物館

埼玉県立嵐山史跡の博物館

# 埼玉県立史跡の博物館紀要

## 第 9 号

---

### 目 次

旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料

－富山県氷見市朝日貝塚の骨角器－ ..... 倉澤麻由子 (1)

〈資料紹介〉根岸武香と利仁神社経塚 ..... 水口由紀子 (11)

小学校社会科第6学年の学習におけるさきたま史跡の博物館の役割

..... 向井 隆盛 (23)

埼玉古墳群をめぐる研究者たち ..... 井上 尚明 (35)

# 旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料

## —富山県氷見市朝日貝塚の骨角器—

倉澤麻由子

### 1 はじめに

平成25年の財団法人長瀬綜合博物館の解散に伴い、同博物館の所蔵資料の埼玉県への寄贈が決定した。長瀬綜合博物館は、眼科医の塩谷覚三郎氏が長年収集した考古資料や自然石などを保存、展示するための施設として昭和32年に発足した。収蔵資料は、考古・歴史・自然といった各分野に及んでおり、重要文化財の「十鈴鏡」や県指定文化財の「古瓦」、「笑う埴輪」などが展示されていた。これらの資料は、専門分野ごとに各県立博物館が受け入れることになり、さきたま史跡の博物館は考古資料を受け入れることになった。

当館が受け入れた資料は土器や石器、埴輪から骨角器まで幅広い種類のものであった。資料は、注記が施されて出土遺跡がわかるものや、注記がないものなど様々であったが、骨角器は出土遺跡や発掘された年代が明記されたキャプションが伴っていた。

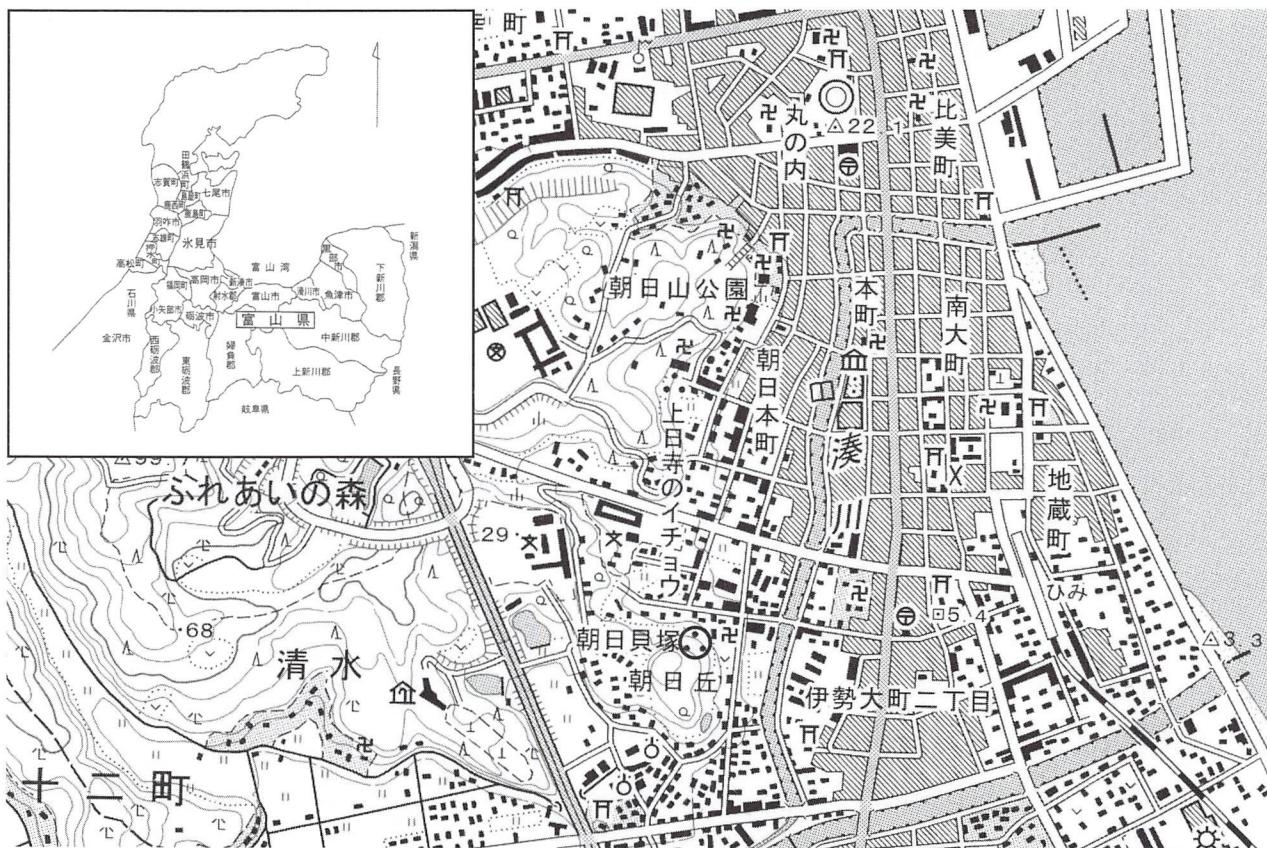
これらのキャプションを調べると、骨角器は富山県氷見市朝日貝塚や岩手県大船渡市下船渡貝塚など著名な貝塚出土の資料が多いことが分かった。本来なら全ての資料を紹介したいところではあるが、数が多く出土遺跡も数遺跡あることから、今回は朝日貝塚に絞って資料を紹介したい。

### 2 富山県氷見市朝日貝塚について

朝日貝塚は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる氷見市に所在し、市街地の南西部にある。朝日山丘陵の東南端、標高33mの潟山と呼ぶ丘の東麓台地にある。この台地は、東西が北部で広く南部で狭まる標高が丘陵裾で約7mの低台地である。現在の汀から直線距離で約800mの位置にある。遺跡の継続時期は縄文時代前期から中世に及ぶ。日本海側の数少ない縄文時代の鹹水貝塚として周知されており、大正11年に国指定史跡に指定されている（第1図）。

朝日貝塚は、大正7年7月誓度寺の移転建築のため、氷見郡氷見町朝日字馬場内を地均ししたところ、貝殻や土器片が多数出土したことから発見された。同年6月に氷見郡宇波村大境の洞穴内で人骨や土器が多数出土し、東京帝国大学助手柴田常恵が7月と9月から10月にかけて調査を実施したのち、朝日貝塚の調査も行った。また大正10年にも朝日貝塚の調査が行われている。この調査で朝日貝塚の概要が明らかになり、大正11年に貝塚としては、初めて史跡として指定を受けた。

大正11年に史跡に指定されたが、同年に誓度寺が火災で焼失した。誓度寺は大正13年に再建されることになったが、それに先立って発掘調査が実施された（第2図）。この調査には、当時内務省史蹟名勝天然紀念物調査会考查委員であった柴田常恵と内務省嘱託田澤金吾が出張している（氷見市教育委員会1995）。

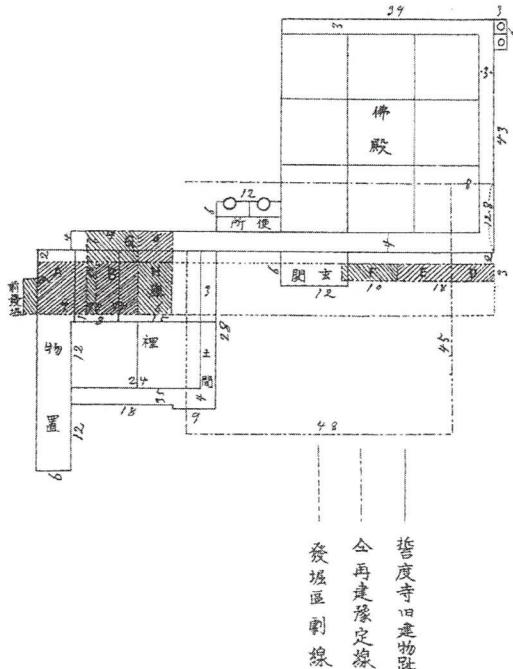


第1図 氷見市朝日貝塚位置図 (1:25000)

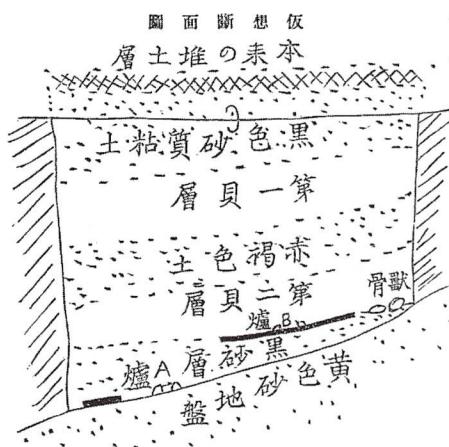
この調査では、縄文時代前期と中期の炉を持つ住居跡2軒が重複して検出された（第3図）。この住居跡は炉跡を持つ住居跡としては、国内最初の発掘例として知られている。また、骨角器は有孔大針状骨器、小針状骨器、笄状骨器の3点が図と共に紹介されている（第4図）。有孔大針状骨器と笄状骨器は第1貝層からの出土である。一緒に出土した土器から縄文時代中期の資料と判明している。出土した資料は、柴田によって内務省に送られた（大村・林1924）。

今回、寄贈された骨角器の内、朝日貝塚の骨角器は笄2点、大針1点、骨鏃1点、ヤス状刺突具2点、刺突具1点、用途不明骨角器1点の計8点である。これらの骨角器に「富山県氷見郡朝日貝塚 大正13年」と書かれたキャプションが伴っていた。そのため、当館に寄贈された朝日貝塚出土の骨角器は、柴田が内務省に持ち帰った大正13年の調査で出土した資料の可能性が高い。

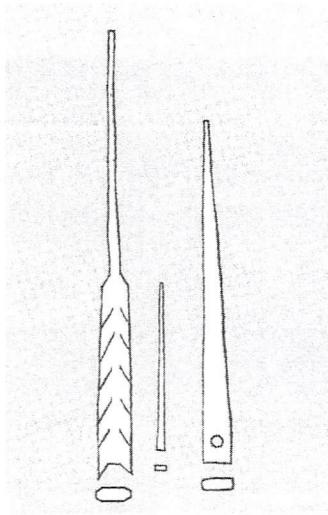
さらに大正13年の調査について調べてみると、國學院大學日本文化研究所が柴田常恵の写真資料や野帳などを一括して保存している事がわかった。同研究所は、柴田常恵の写真資料をまとめて写真目録として発行している。その中には、朝日貝塚の発掘写真も掲載されている。残念ながら、当館に寄贈された骨角器の出土状況がわかる写真は掲載されていなかった。しかし遺物写真の1枚に、朝日貝塚出土の笄の内、最も装飾が施されている笄と同一資料と考えられる笄が撮影されている。写真には出土遺跡などの説明はないが、同一資料と考えて間違いないだろう（第5図）。



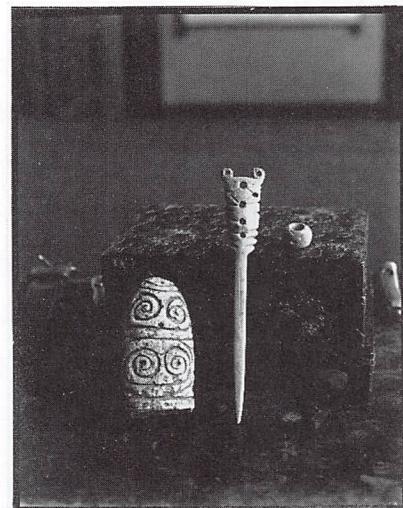
## 第2図 大正13年朝日貝塚発掘調査地区 (大村・林1924)



第3図 大正13年朝日貝塚  
住居跡堆積土層（大村・林1924）



第4図 大正13年発掘調査  
出土骨角器 (大村・林1924)



第5図 柴田常恵撮影遺物写真  
(國學院博物館所蔵)

第5図の中央の笄が、朝日貝塚出土の笄と思われる。一緒に写っている石剣の先端と骨製玉も、当館に寄贈された資料と同一資料と考えられるが、これらの資料は別の遺跡名のキャプションが伴っているため、今回は報告しない。稿を改めて報告したいと思う。

### 3 寄贈された朝日貝塚出土の骨角器

以下、個々の資料について記載していく（第6図）。なお、器種名及び部位名は『東京国立博物館所蔵 骨角器集成』（東京国立博物館2009）及び『骨角器の研究 繩文編I』（金子・忍沢1986）を参考にした。

1は笄である。全長13.9cm。頂部が幅広の四角形で頂端部が2つの円形の突起状になる。穿孔と彫刻で幾何学的な文様を描いている。沈線の彫刻はサイドにまで施されていて、精巧に作られている。横方向に丁寧に磨かれている。

2は笄である。全長20.1cm。湾曲しており、頂部から縦方向と頂端直下の横方向に開孔がある。2つの開孔は連結しておらず、それぞれ独立している。表面の風化が進んでおり、磨きの方向は確認できない。

『東京国立博物館 骨角器集成』では、串状の湾曲し頂部に穿孔がある骨角器を、用途は不明としながらも棒状垂飾とし、笄とは異なる器種としている。2の形状は、この棒状垂飾に似ているが2つの開孔は連結していない。頂部からの縦方向の開孔と頂端部直下の横方向の開孔がある棒状垂飾は、2つの開孔が連結し斜行穿孔となる。そのため、開孔が連結していない2は棒状垂飾ではなく笄とした。しかし斜行穿孔の棒状垂飾の未成品の可能性はあるだろう。

3は大型針である。全長18.5cm。皮革や布などを縫い合わせる「縫い針」としての機能が推定される。頂部にかけて幅広になり、穿孔されている。全長が18.5cmで平たい作りをしている。横方向に丁寧に磨かれている。

1924年の大村正行・林喜太郎の報告には、頂部に穿孔が施された細長い骨角器が掲載されており、有孔大針状骨器として報告されている（大村・林1924）。同一資料の可能性がある。

4はヤス状刺突具である。全長6.5cm。先端が鋭利に尖っている。基部は先端に比べると、尖りが緩やかである。横方向に丁寧に磨かれている。

5はヤス状刺突具である。全長11.6cm。管状の骨を半裁して先端を尖らせている。基部は斜めに割れている。横方向に磨かれている。

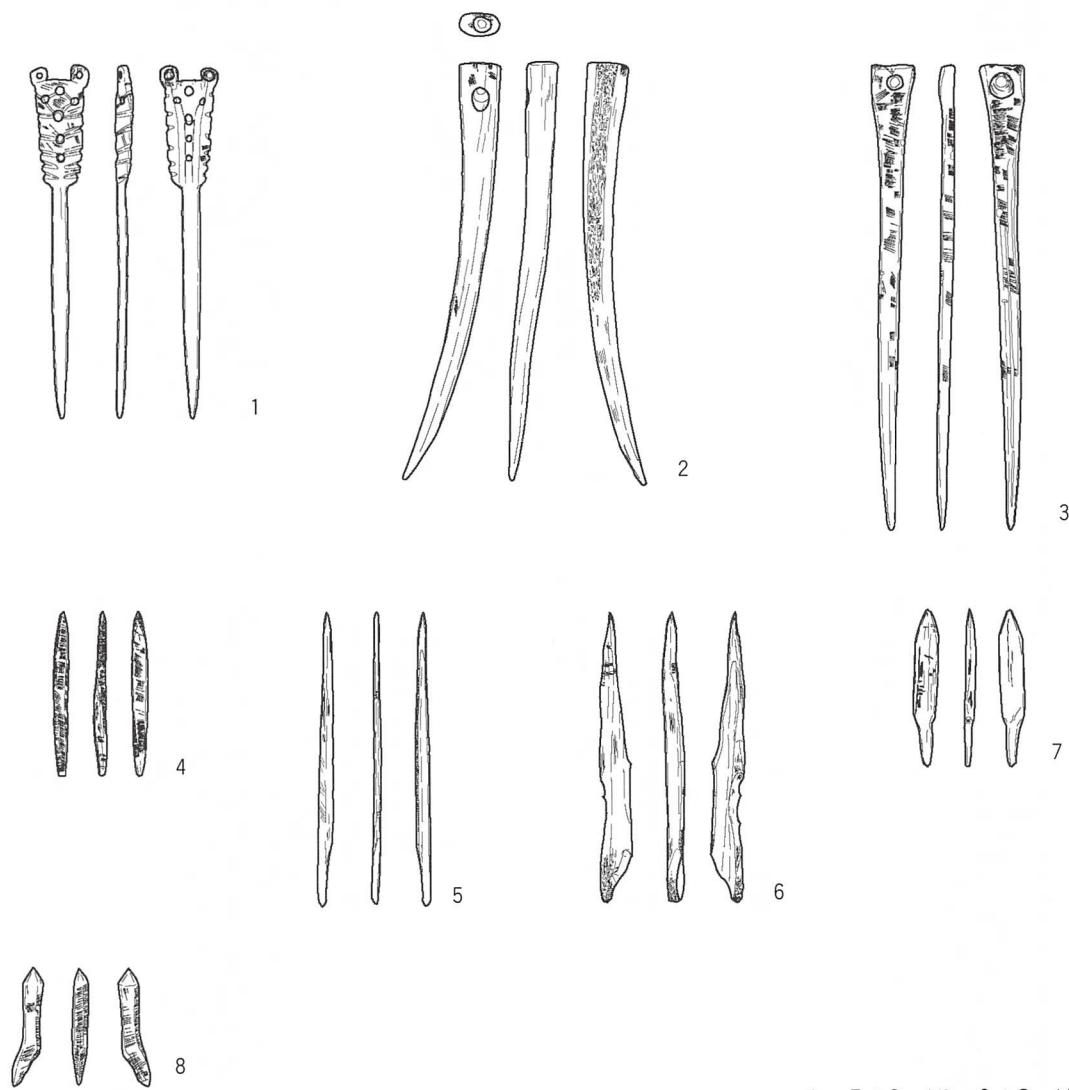
6は刺突具である。全長11.4cm。先端が鋭利に尖っている。基部は一部が欠損しているため、形態は不明である。ヤス状刺突具は長い柄に取り付けるため両端を尖らせるが、6は基部の部分が幅広くなる。そのため、ヤス状刺突具とは区別し、刺突具とする。

7は骨鏸である。全長6.2cm。基部がくびれている。器体は扁平だが、基部は三角形状を呈している。

8は用途不明の骨角器である。全長3.1cm。「く」の字をした小型の骨角器である。先端の片方が鋭利に尖っており、もう片方は扁平になっている。横方向に丁寧に磨かれている。欠損部位もなく、最初からこの形を意識して作られている。

「く」の字に曲がっている小型の骨角器は、挟み込み式ヤスの器体に接合した逆刺という説や有尾刺突具という説がある。逆刺は全体の形が「く」の字状を呈し、一方の断面形で、もう一方が半円または扁平な形をする。扁平な断面をする側にアスファルトが付着し挟み込み式ヤスの器体に接合したものと考えられている（金子・忍沢1985）。

有尾刺突具は「ノ」の字状をした刺突具で、ノの字状の尾部が尖り逆刺の役割をしたと考えら

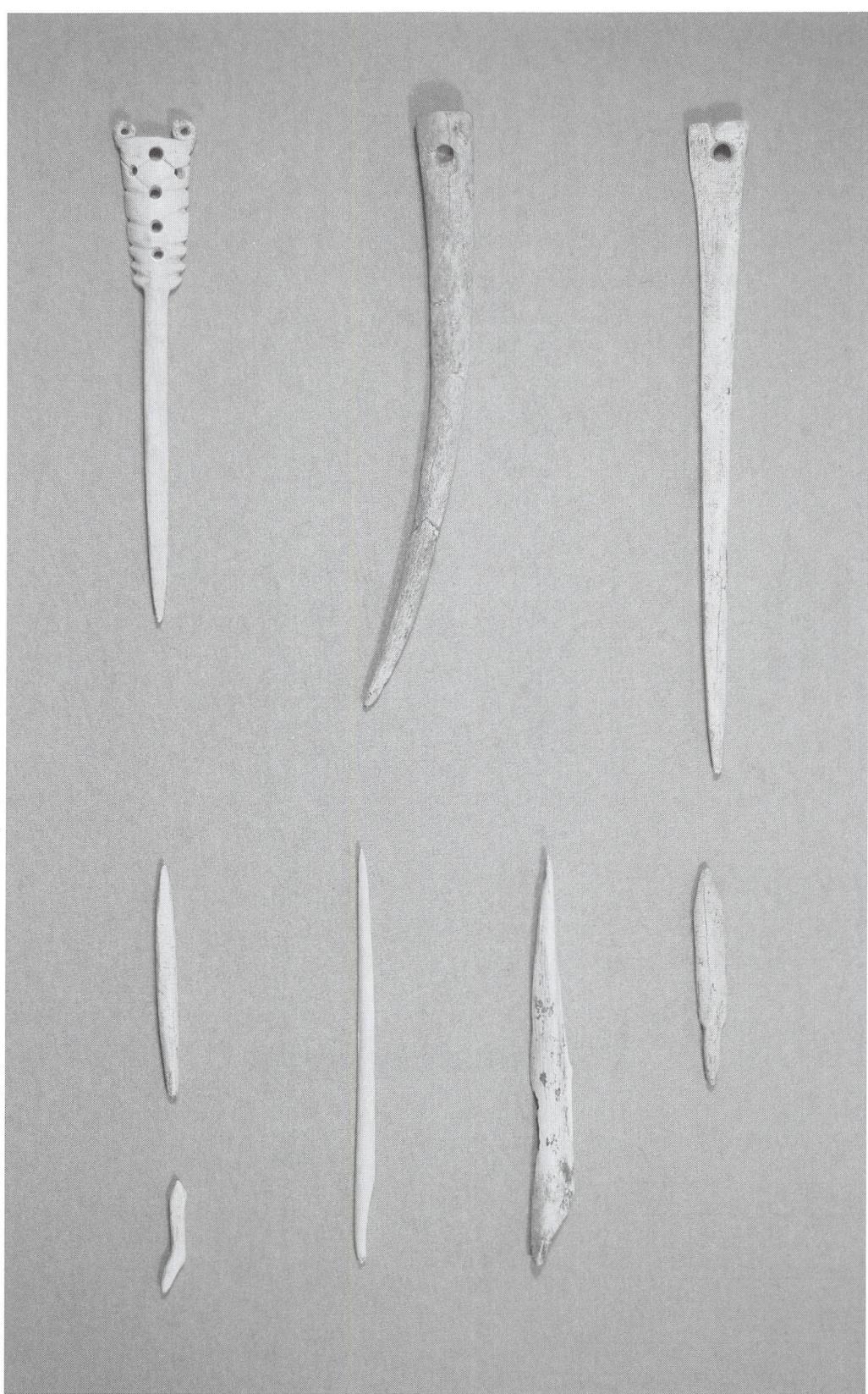


1 ~ 7 : S=1/3 8 : S=1/2

第6図 朝日貝塚出土骨角器実測図

番号	全長 (cm)	幅 (cm)
1	13.9	2.3
2	20.1	1.7
3	18.5	1.8
4	6.5	0.6
5	11.6	0.5
6	11.4	1.2
7	6.2	1.0
8	3.1	0.5

第1表 朝日貝塚出土骨角器計測表



図版1 朝日貝塚出土骨角器

れている（横浜市歴史博物館2016）。

逆刺と考えるならば、本体との接合部分に接合するためのアスファルトが付着していたり、紐で縛って接合するための擦痕が残ったりすると思われるが、8にはそのような痕跡は見当たらない。また、有尾刺突具は屈曲が8に比べると緩やかなため、有尾刺突具と断定することは難しい。そのため、今回は用途不明の骨角器とする。

骨角器は機能や用途が不明のものが多く、形態的な特徴から分類されるため分類作業が難しい。例えば、笄と針は同じく串状をしており、全長も似ている。区別するのは困難である。大枠としては、頂部の装飾があるものを笄とし、ないものを針としている。そのため、今回は1を笄とし3を針とした。1を針として使用することは不可能だと思うが、3の大針で髪をまとめることは可能である。串状の頂部に装飾のほとんどない資料は、針と笄の両方の可能性を考慮する必要があるだろう。また3のような頂部に穿孔のある串状の骨角器は刺突具と報告されるケース（町田2007）もあり、現状では笄や針、刺突具を完全に区別することは難しい。

#### 4 朝日貝塚周辺の骨角器

寄贈された骨角器の出土遺跡を把握する手掛かりは注記とキャプションだけである。骨角器は貝塚や低湿地など出土する遺跡が限られるため、出土量は決して多くない。また土器のように時期的、地域的な特徴が顕著ではないため編年を組んだり、地域差を求めたりすることが難しい。寄贈資料を観察しただけではわからないことも多いため、富山県を中心に北陸地方の縄文時代の骨角器について調べてみることにした。

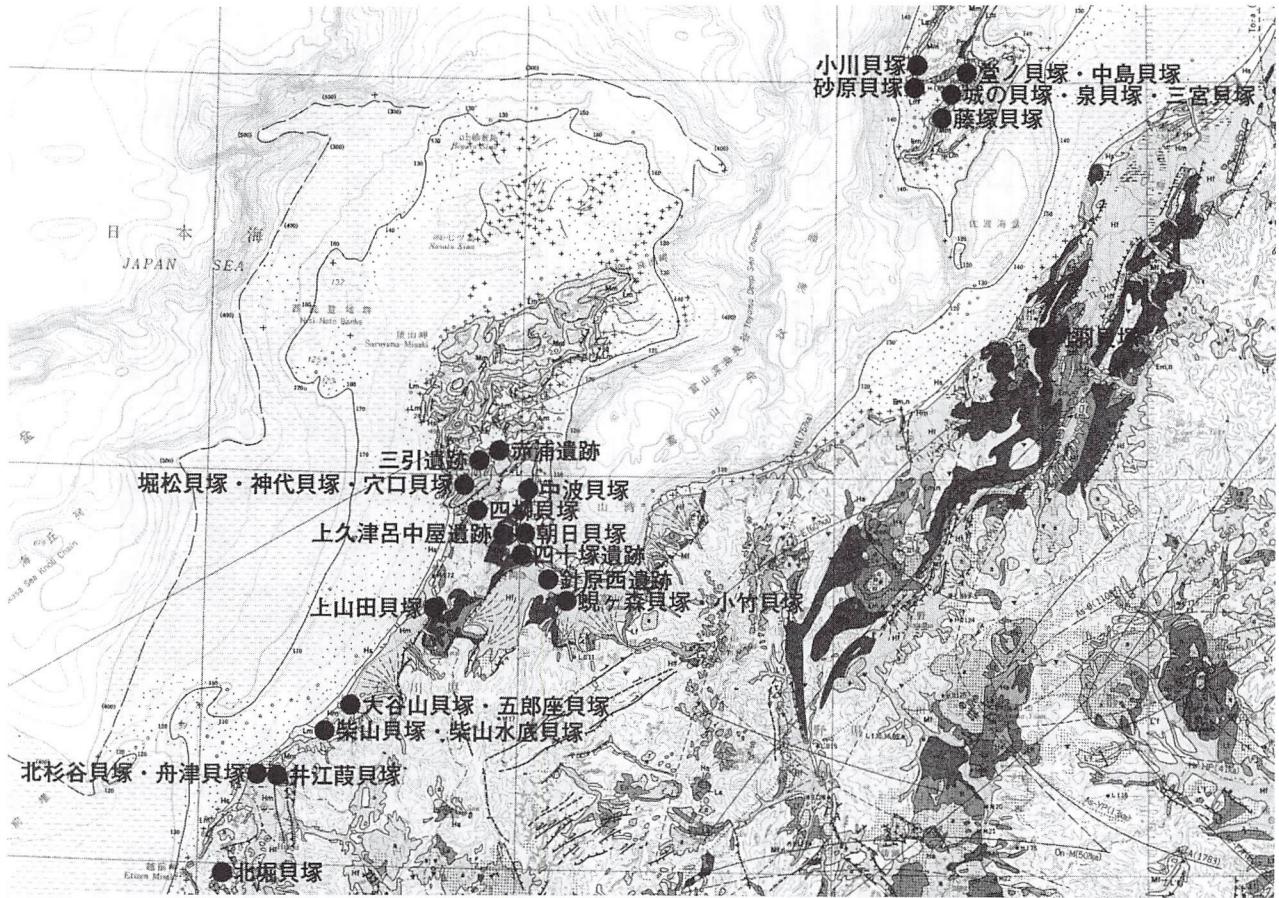
朝日貝塚出土の骨角器で特徴的な資料としては、精巧な装飾が施された1の笄や、湾曲した2の笄が挙げられる。そこで、この2点の笄を中心に、周辺の遺跡から出土した骨角器について調べてみることにした。

北陸地方の骨角器研究は、それほど多くはなく、貝塚の調査報告書等で記載されているものがほとんどである（町田2007）。骨角器が出土しやすい貝塚の調査が、関東や東北地方に比べて少ないことが理由として挙げられるだろう。日本海側は太平洋側に比べて、潮の干満が少ないと貝塚が少ないと言われている（山内1934）。福井県鳥浜貝塚や富山県小竹貝塚など大型の貝塚の調査も進められているが、全体的に小規模な貝塚が多い。また、今まで貝塚と認識されていなかった内陸の遺跡から貝層が検出されることもあり、日本海側の縄文海進について把握できれば、その縁辺の貝塚を探し出すことも可能ではないだろうか。

朝日貝塚も貝層は薄く、貝塚としての規模は小さい。北陸地方の代表的な貝塚の在り方といえるだろう。

骨角器が出土した貝塚で朝日貝塚の周辺貝塚は、朝日貝塚よりさらに内陸の氷見市上久津呂中屋敷跡遺跡や日本海側の最大級の貝塚と言われる富山市小竹貝塚が挙げられる。どちらも縄文時代早期～前期にかけての貝塚で、朝日貝塚より古い貝塚である。

上久津呂中屋敷跡遺跡は貝塚と認識されていなかったが、2005年に能越自動車道建設のための緊急調査により貝層が部分的に認められた。カキやサルボウ、獸骨や魚骨が出土しているが、貝層の厚さは20cm程度と薄く混貝土層であった。



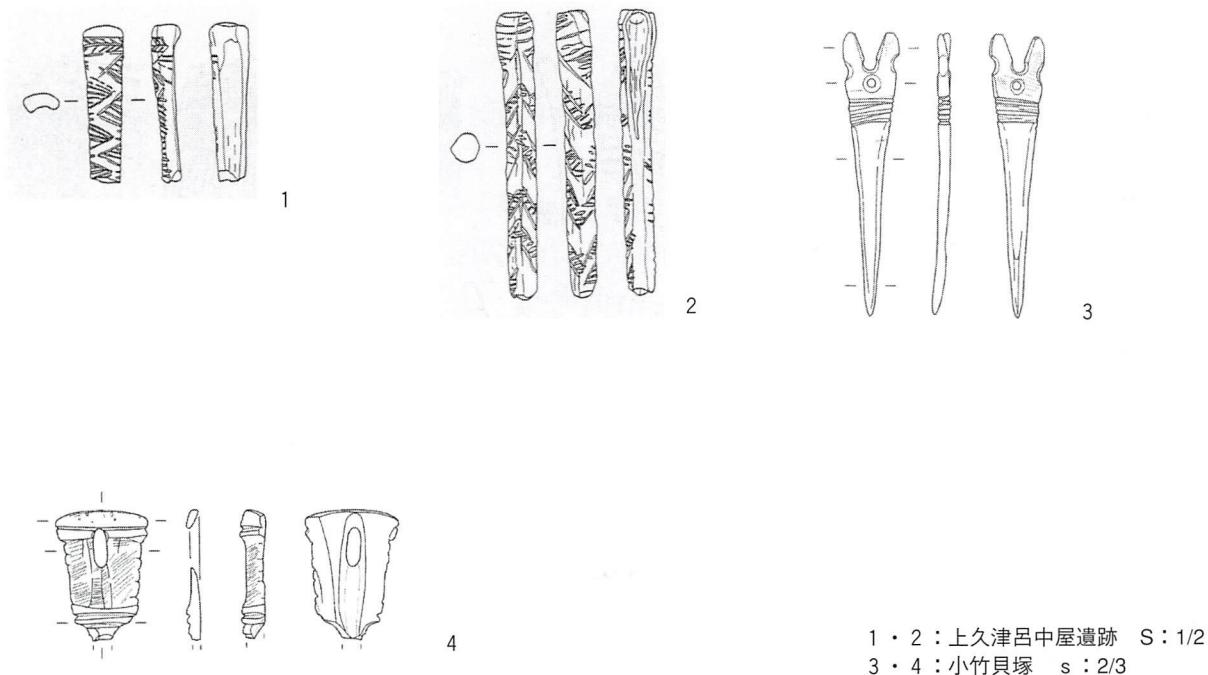
第7図 北陸地方の貝塚分布（町田・杉山2007）より一部抜粋

骨角器は、ヤス状刺突具や笄、垂飾が出土している。笄は、鋸歯状彫刻を持つ串状をしている（第8図-1・2）。

小竹貝塚は北陸新幹線の建設に伴い調査が行われた。大型の貝塚で日本海側の代表的な大規模貝塚である。ヤス状刺突具や針などの生産道具から笄や垂飾、貝輪などの装飾品まで様々な骨角器が出土している。小竹貝塚から出土している笄の中には、朝日貝塚から出土した笄のような台形の頂部の笄や頂部が2つの突起状になる笄が出土している（第8図-3・4）。時期は違うが、富山湾内に朝日貝塚出土の笄と似た形態の笄が出土している点は注意したいと思う。

朝日貝塚と同時期の骨角器が出土した貝塚は、石川県羽咋市四柳貝塚やかほく市上山田貝塚などが挙げられ、富山县内では見つかっていない。上山田貝塚では、ヤス状刺突具や針、穿孔のある垂飾が出土しているが、朝日貝塚の笄のような資料は出土していない。四柳貝塚も同様である。

このように北陸地方の骨角器研究は、出土量が少ないとから関東や東北地方の沿岸部に比べると、あまり進んでいないのが現状と思われる。しかし、小竹貝塚のように骨角器が多数出土している遺跡であることから、資料の増加も見込まれるだろう。



第8図 朝日貝塚周辺貝塚出土骨角器

## 5まとめ

旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料は膨大な量で、出土地が不明のため考古学的な価値の低い資料や、後世に作られた可能性の高い資料などもある。その中で骨角器は出土した遺跡名と年号の記載があったため、確認のために調査履歴を調べることにした。調査の過程で、旧長瀬綜合博物館所蔵の骨角器は柴田常恵に関係する資料という事が判明した。

これらの骨角器が出土した遺跡の多くが、現在は国指定史跡に指定されている貝塚である。大正13年当時、柴田は内務省の史蹟名勝天然紀念物調査会の考查員であった。出土資料が柴田の手元にあったという事は、史跡に指定するための確認調査を考查員が現地に赴いて、視察しただけではなく実際に指揮していたのであろう。戦前の史跡指定の方法の一端を垣間見ることができたのは、国指定史跡埼玉古墳群を管理するさきたま史跡の博物館の学芸員として、参考になった。

また、朝日貝塚は戦前に史跡に指定されたことで、開発が行われず発掘調査もあまり行われていない。これは文化財保護の観点から考えると非常に素晴らしいことである。しかし、同時に出土資料が少ないとも言える。そのため、今回報告した朝日貝塚出土骨角器は、朝日貝塚の学史上貴重な資料と考えられる。今回は、この資料がどのような経緯で旧長瀬綜合博物館に展示されるようになったのかはわからなかったが、その経緯が分かれば、資料の信憑性もさらに増すと思われる。

長年にわたり、資料を保存・展示してきた旧長瀬綜合博物館の精神を受け継ぎ、寄贈された資料を今後とも保存・管理し、展示や普及活動など様々な形で活用していきたい。

#### 《引用・参考文献》

- 石川ゆづは 2005 「上久津呂中屋敷遺跡 下層」『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 宇ノ木町教育委員会・石川考古学研究会 1979 『上山田貝塚 石川県河北郡宇ノ木町上山田遺跡調査報告』
- 大村正行・林喜太郎 1924 「朝日貝塚発掘調査報告」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告 第六號』  
富山県
- 金子浩昌・忍澤成視 1986 『骨角器の研究 繩文篇 I』慶友社
- 東京国立博物館 2009 『骨角器集成』
- 氷見市教育委員会 1995 『朝日貝塚 I -範囲確認試掘調査概要 (1)』
- 氷見市教育委員会 2002 『氷見市史 資料編五 考古』
- 町田賢一・杉山大晋 2006 「北陸地方における貝塚のあり方」『富山考古学研究 第9号』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 町田賢一 2007 「続・北陸地方における貝塚のあり方-骨角器について-」『富山県考古学研究 第10号』  
(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 町田賢一編 2014 『小竹貝塚発掘調査報告－北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告X－  
第一分冊 本文編』(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 山内清男 1934 「貝塚は何故日本海沿岸に少ないか」『ドルメン 第三卷九號』岡書院
- 横浜市歴史博物館 2016 『称名寺貝塚 土器とイルカと縄文人』

#### 《協力機関・写真提供》

- 國學院大學研究開発推進機構

## 根岸武香と利仁神社経塚

水口由紀子

### はじめに

埼玉県立文書館に寄託されている林家文書の中に東松山市利仁神社経塚<sup>(1)</sup>の発見の経緯と具体的な内容について記したものがある（林家文書7545）。それは、「野本村出土物を観る記」と題する、根岸武香直筆の草稿である。

これは、題名が異なるものの、内容から『考古界』第1篇第1号に掲載された「武藏大里郡野本村の発見物に就いて」の原稿であることがわかる。これによって、利仁神社経塚とその出土遺物はいち早く全国に紹介されることになった（根岸 1901）。

その資料は帝室博物館に入り、現在は東京国立博物館の所蔵資料となっている。

本稿では、その原稿を紹介するとともに、その特徴や意義についてまとめてみたい。

### 1 根岸武香の活動

本題に入る前に、根岸武香について紹介しておきたい。

根岸武香は天保10年（1839）5月5日に生まれ、明治35年（1902）12月3日に64歳で亡くなった。武藏国大里郡甲山村（現熊谷市）の豪農で、政治家、郷土史家、国学者、考古学者など多くの顔を持つ。

父友山は名主を務めたが、幕末は尊王攘夷派であった。邸内に私塾や剣術道場を開き、近郷の子弟に開放した。

武香の学術面での活動で有名なものは吉見百穴の調査支援と保存活動である。また、さまざまな資料や文書のコレクターでもあり、埴輪や土偶などの考古資料を所蔵し、『蒐古舎』という陳列室を甲山の自宅の一角に造った。

江戸後期から明治期にかけては古物愛好家たちが集まる「好古」の会が多くあり、盛んに活動していた。古いものを持ち寄り、品評し合った。その領域は古美術・歴史学・文学・科学、さまざまな分野を内包するものであった。

明治10年代に「東京人類学会」、「好古社」が創立され、遅れて明治29年に「集古会」が結成された。武香は集古会の会長に就いた時期もあった。また、古器物や文書などの膨大なコレクションを元に、「好古」の繋がりで埼玉と東京の交流をすすめるパイプ役でもあった。

そのようなことから、今回紹介する偶然発見された経塚を訪れる機会にも恵まれたのである。

武香所蔵の古文書、地誌・地図、古銭関係の書物、古印関係書などの多くは昭和6年（1931）に帝国図書館に寄贈され、現在は国立国会図書館で『冴山文庫』として所蔵されている。冴山文庫は近年、デジタル化が終了し、その価値が再評価されている（大沼 2012）。

## 2 根岸武香「野本村出土物を観る記」(写真1~12)

この草稿は豎帳の形態で、冴山文庫の専用の原稿用紙に筆で書かれている。ところどころ朱書きの訂正が入り、推敲した痕が見られる。

『考古界』と比較すると、概ね推敲後の原稿が活字化されている。双方を比較してみると、校正で直した箇所は意外と少ないと感じた。

本文は11頁あり、それに建久7年銘経筒拓本、墨書銘古鏡拓本、釘書銘古鏡拓本、刀子五口図の4つの拓本・図が付いている(写真10~13)。

原稿の中にも出土品の概略図(写真3・4)や出土地周辺の地図(写真6)、経筒等の出土位置(写真7)が丁寧に描かれている。

この他に拓本2枚(写真14・15)と概略図(写真16)が1枚残されており、これらは現地で採った拓本、現地で描かれた出土品の概略図と思われる。この概略図に描かれていない出土品もあるため、本来、概略図はこの他に数枚はあったものと思われる。この概略図を元に、帰宅後、図を改めて描きおこしたのであろう。

本文には明治34年3月11日に利仁神社の境内を春の祭りに先立つ整地作業中に経塚が発見されたこと、すぐに警察署から連絡が入ったが、東京の別宅(東京都文京区湯島)に滞在中であったため、現地に出向いたのは29日であったことが記されている。

武香は先ほども述べたとおり、明治35年(1902)で亡くなっているので、これを書いたのは亡くなる前年、63歳であった。

文中に、日が暮れた頃、冴山の自宅に帰ったとあるので、1日で資料調査を終えている。限られた時間の中で、採寸して概略図を描き、拓本を採り、銘文を読んでいる。また、付近も歩いて、経塚が占地する古墳の概略図も描いている。調査慣れしている様子が伺える(助手のような人間を同行していたのかは文面からは読み取れない)。

第2図左は武香が描いた古墳と経筒の位置図であるが、現在の古墳の測量図と比較するとかなり近似した形をしている。また、利仁神社の位置が双方で異なり、現在の社殿は明治期以降に建て替えられたことがわかる。

国立国会図書館に寄贈された冴山文庫の『骨董集』には埼玉県会議員の集会で訪れた寺の石灯籠の精緻な模写と拓本が納められおり、このことからも、模写や拓本の技術に長けていたことがわかる。

7頁の地形はフリーハンドで描かれているが、『考古界』の方では地籍図を元にした別な図を使用している。9頁の位置図も書き直されている。

その後、新編武蔵風土記稿を引用し、古墳と利仁将軍に言及している。その中で、武香はこの経塚と利仁将軍は関係は無く、無量寿寺の境内で、眺望が良いという理由からここに経塚が築かれたのではないかと結論付けた。

そして、最後に、火災によって溶けてしまった無量寿寺の梵鐘の銘文をあげ、その中に登場する大施主のひとり「橋氏女」と経筒銘文中の「女施主橋氏」とが共通した氏族であることを指摘している。

## おわりに

埼玉県内で確認されている平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての経塚は嵐山町平沢寺経塚、熊谷市妻沼経塚、朝霞市宮戸経塚・大山経塚などがあるが、いずれも偶然に発見されたものである。妻沼経塚を除くと出土状態はよくわからない。妻沼経塚は妻沼小学校の拡張工事中に発見されたが、小澤国平らの努力によって経筒の出土状態が記録として残された。経筒は穴を掘って直接埋めるのではなく、礫で造った小さな石室に入れる場合が多い。

この経塚の場合は武香が経筒を掘り出す場面で立ち会っていないので、残念ながら、埋納状況の記述がない。しかし、古墳の墳頂部に弧を描くように経筒が埋められていたことは確認できる。

この草稿を通して、根岸武香の行動力と観察力の鋭さを観ることができるのでないか。

## 【註】

(1) 根岸武香の『考古界』の論考ではこの経塚に固有の名称は付けていない(根岸 1901)。戦前は名称が一定せず、石田茂作は「武藏野本村経塚」(石田 1929~1930)という呼称を使用している。

戦後、昭和52年に奈良国立博物館で実施された特別展『経塚遺宝』の展示図録では「利仁神社境内経塚」、昭和63年に東京国立博物館で実施された特別展覧『経塚－関東とその周辺』では「利仁神社経塚」という呼称を使用した。本稿では東京国立博物館に倣って「利仁神社経塚」という呼称を使用する。

## 【引用・参考文献】

- 石田茂作 1929~1930 「考古学講座『経塚』」 雄山閣  
大里村教育委員会 2002 「特別展図録 根岸友山・根岸武香の軌跡」  
大沼宜規 2012 「ある好古家のコレクション 根岸武香と青山文庫」 国立国会図書館月報No.620  
埼玉県 1923 『埼玉県史蹟名勝天然記念物調査報告1』  
埼玉県立文書館編 1986 『林家文書目録』 埼玉県立文書館収蔵文書目録 第22集  
奈良国立博物館 1977 『特別展図録 経塚遺宝』  
根岸武香 1901 「武藏大里郡野本村の発見物に就いて」 考古界第1篇第1号  
根岸武香 1901 「野本村経筒発見の余報」 考古界第1篇第2号  
平野 恵 2005 「好古から考古へ－近世から近代へ継承された学問の形態－」 Ouroboros東京大学総合研究博物館ニュース volume9 Number3  
水口由紀子 2010 「東松山市利仁神社経塚出土遺物について」 埼玉県立歴史と民俗の博物館『紀要』第3号  
宮瀧交二 2004 「大里町青山・根岸家の『菟古舎』について」 埼玉県立博物館『紀要』29号

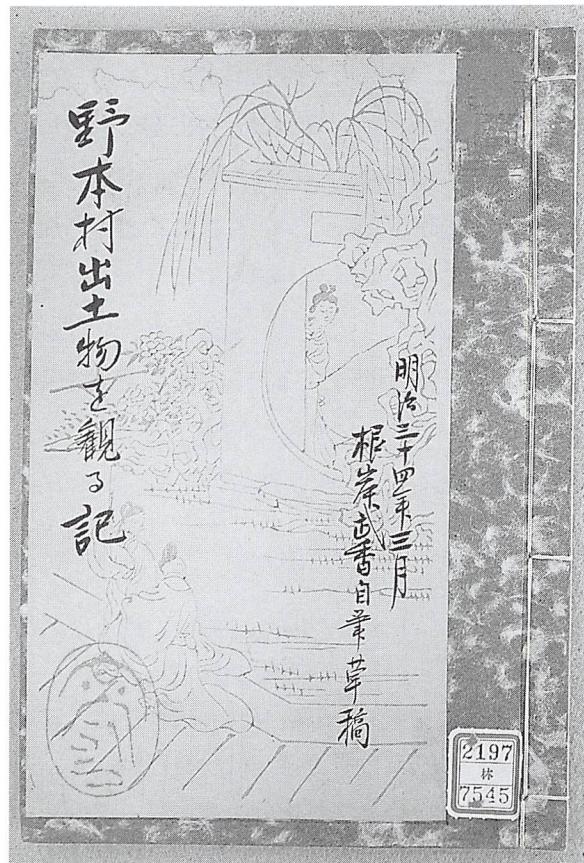


写真1 野本村出土物を観る記（表紙）

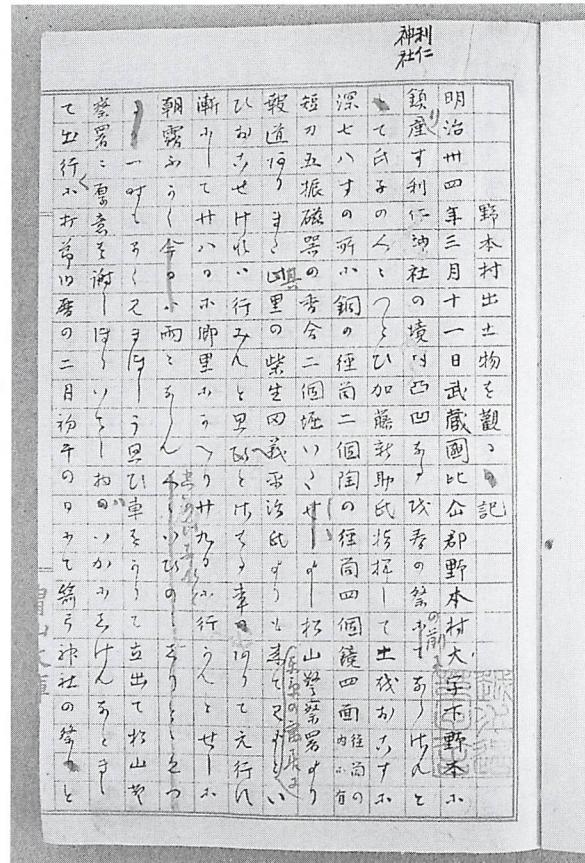


写真2 野本村出土物を観る記（1頁）

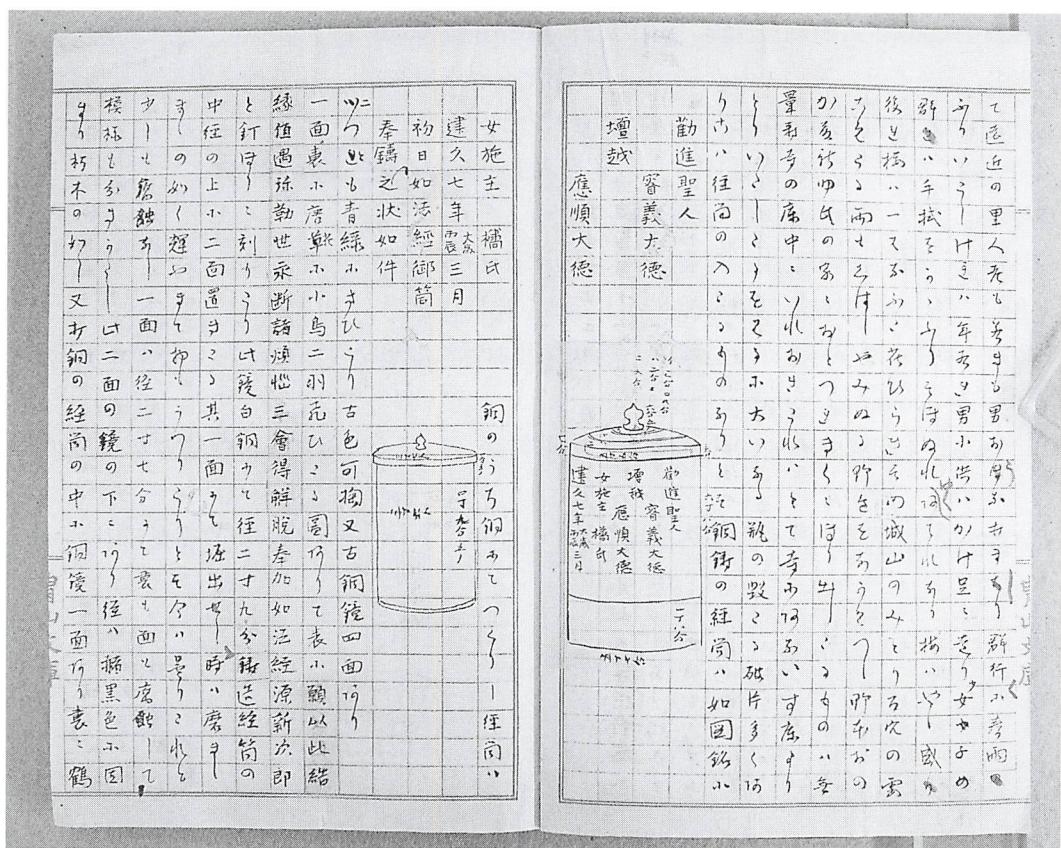


写真3 野本村出土物を観る記（2～3頁）

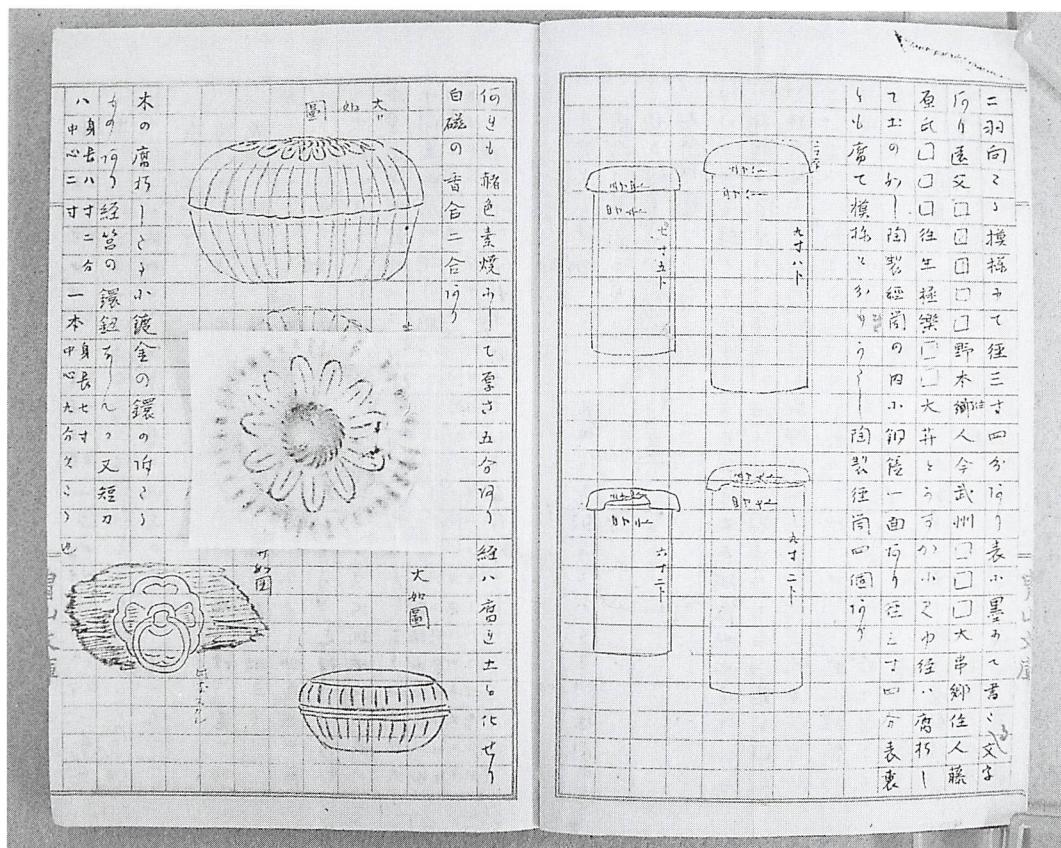


写真4 野本村出土物を観る記（4～5頁）

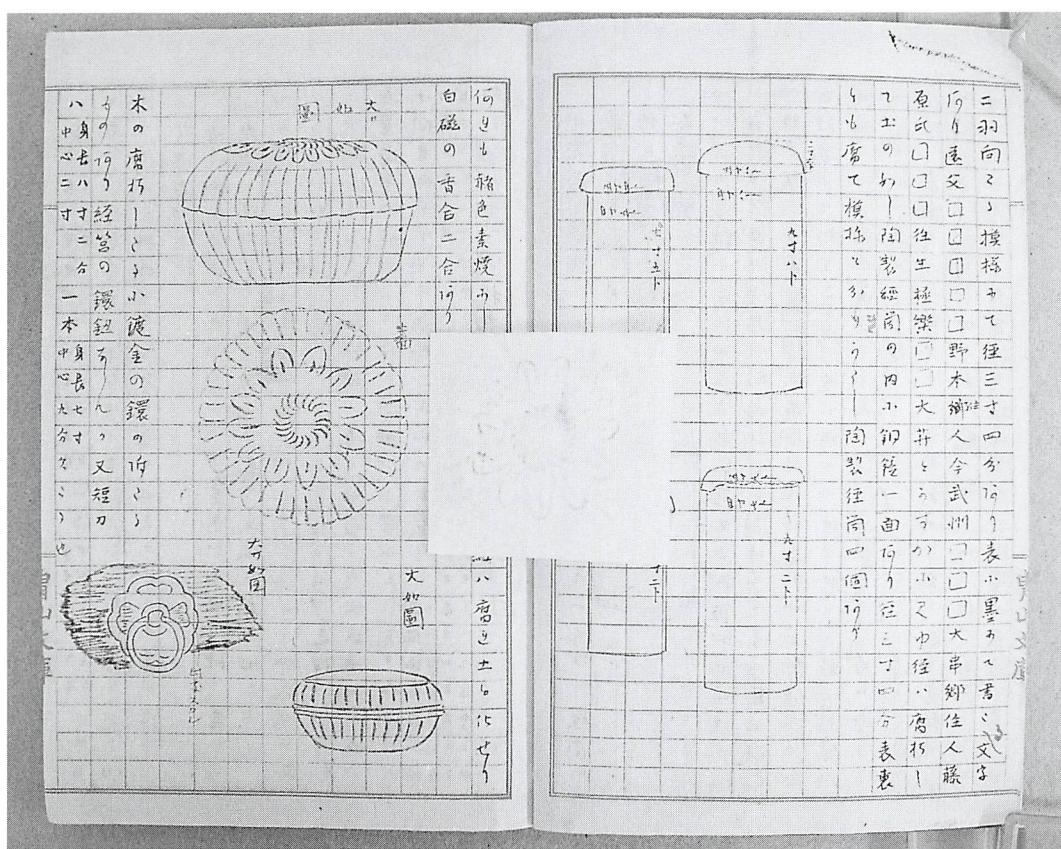


写真5 野本村出土物を観る記（4～5頁）

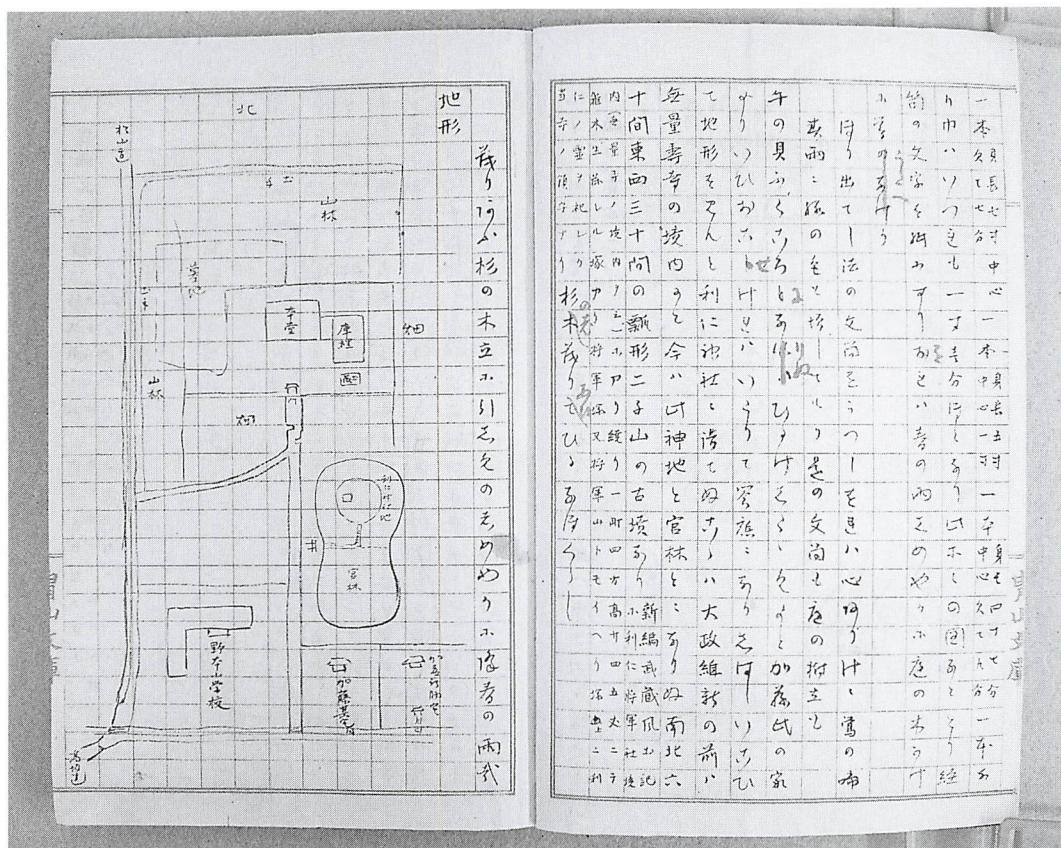


写真6 野本村出土物を観る記（6～7頁）

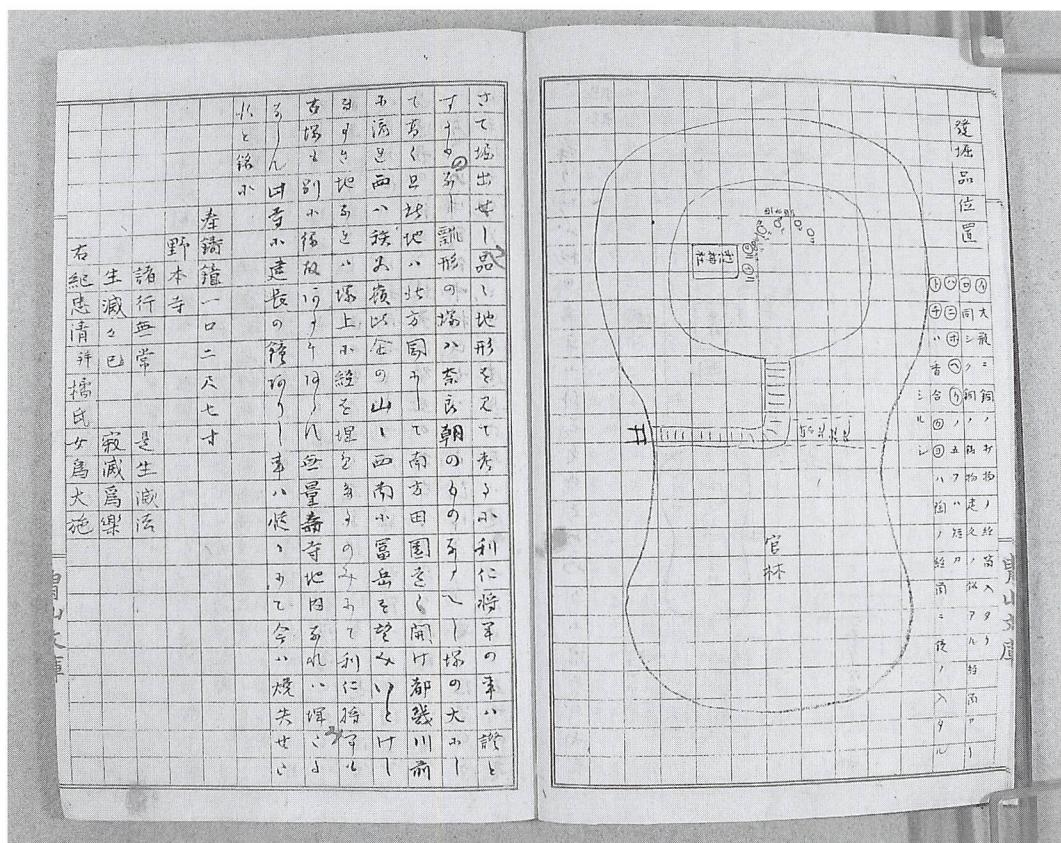
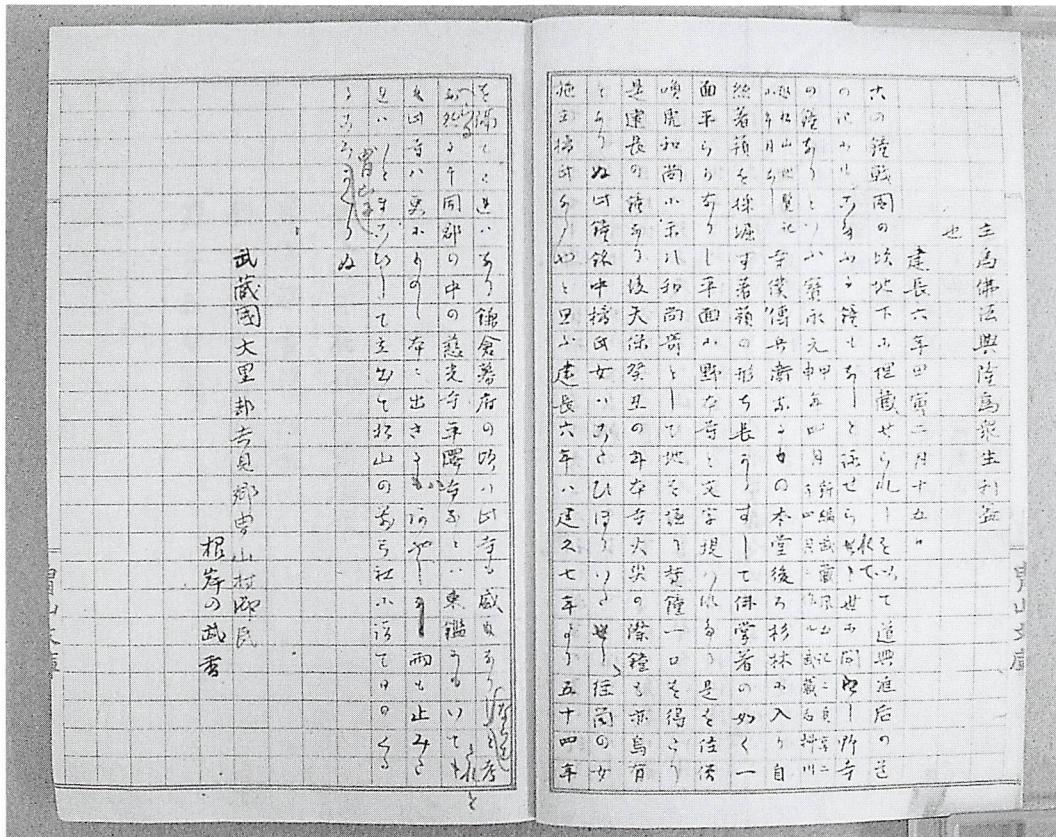
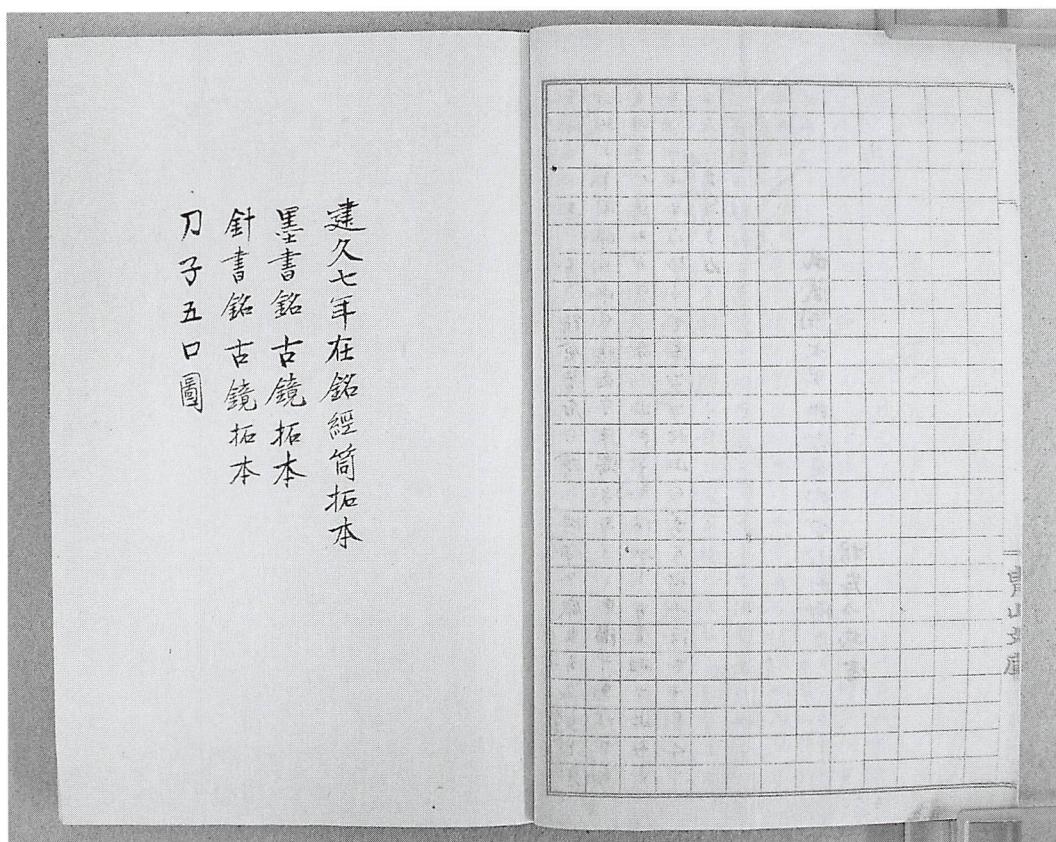


写真7 野本村出土物を観る記（8～9頁）



## 写真8 野本村出土物を観る記（10～11頁）



### 写真9 野本村出土物を観る記（12～13頁）

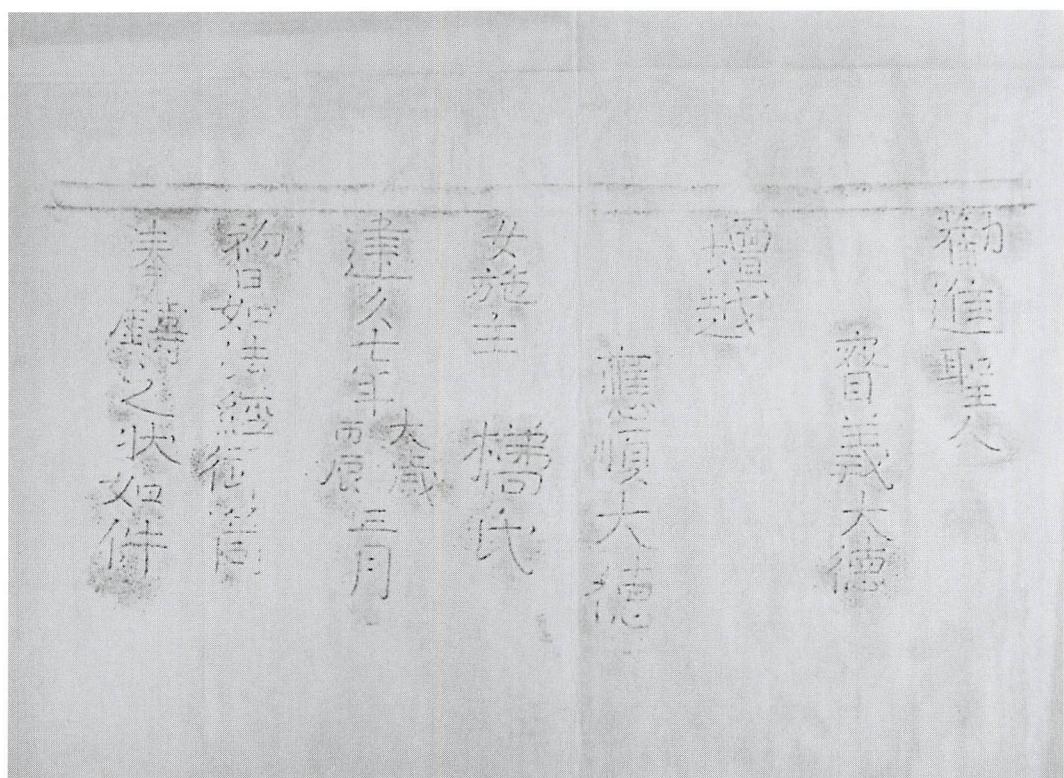


写真10 野本村出土物を観る記（拓本1）

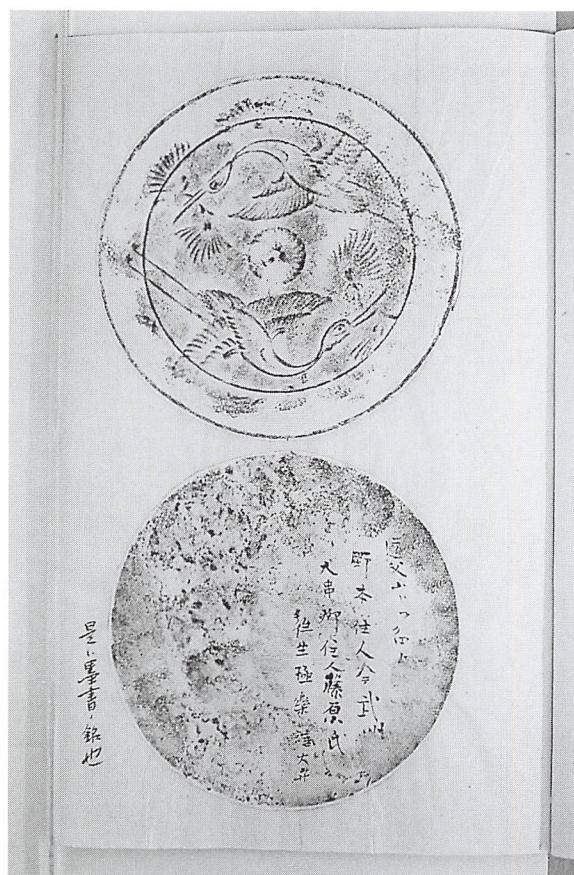


写真11 野本村出土物を観る記（拓本2）

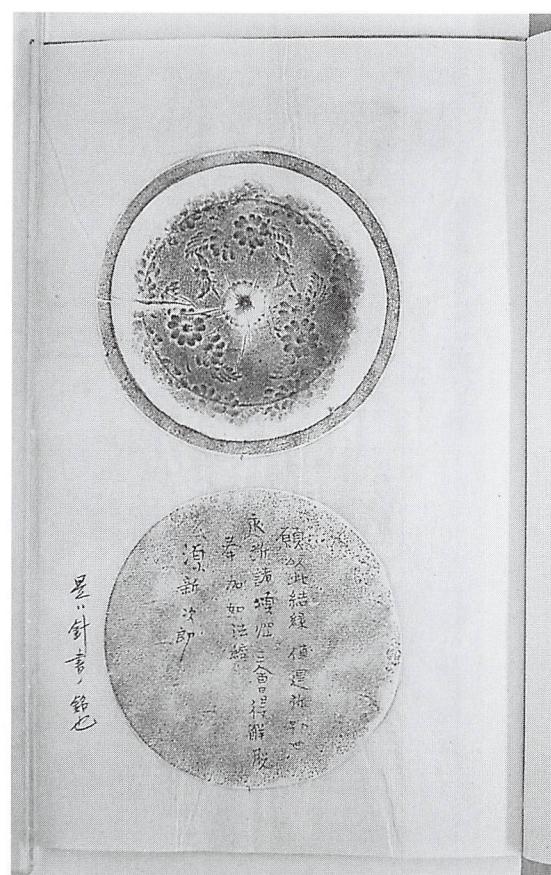


写真12 野本村出土物を観る記（拓本3）

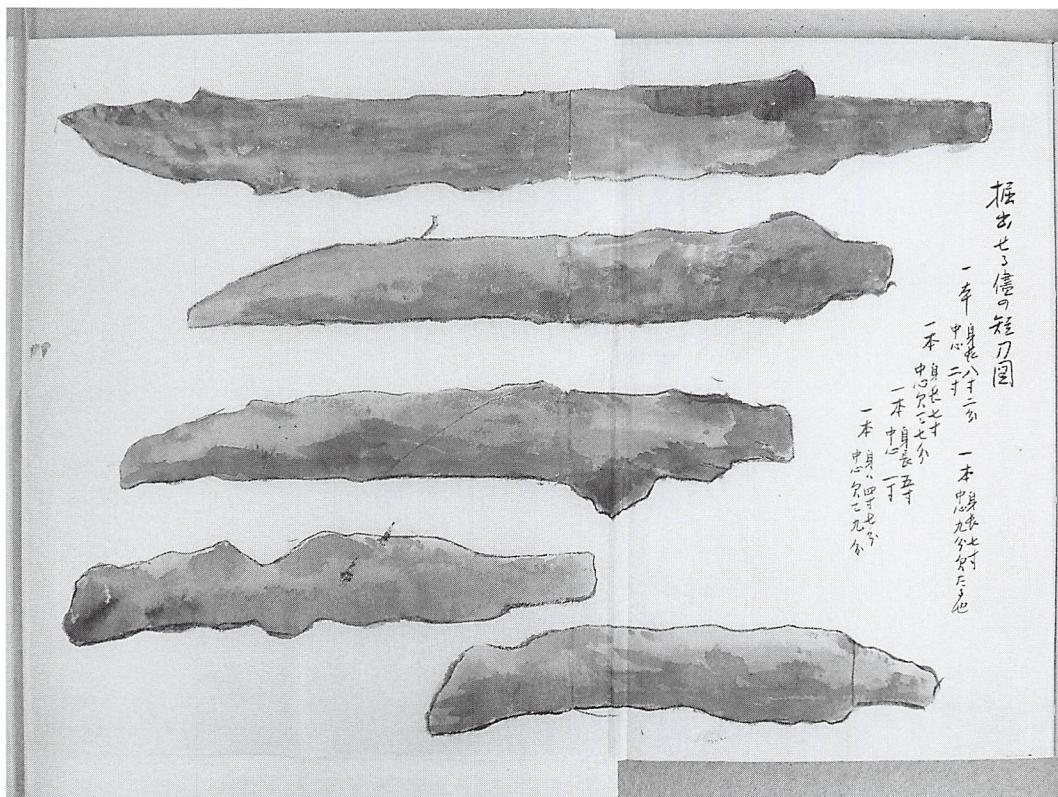


写真13 野本村出土物を観る記（図）

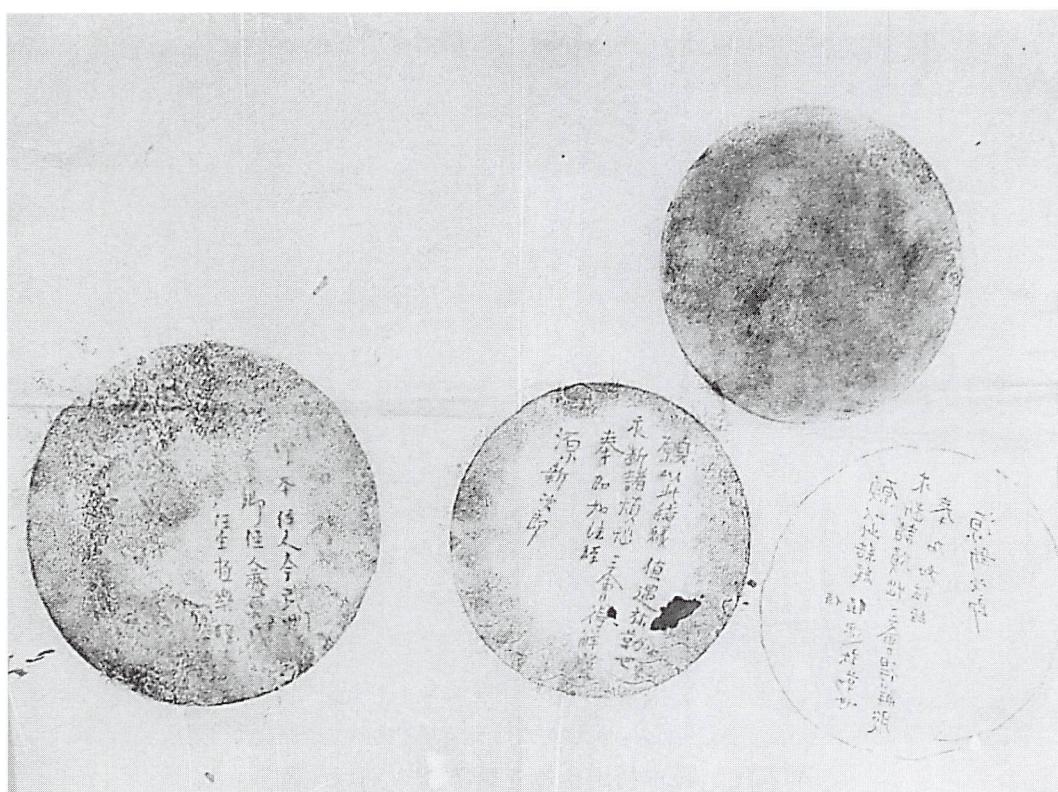


写真14 野本村出土物を観る記（別添え拓本・図）

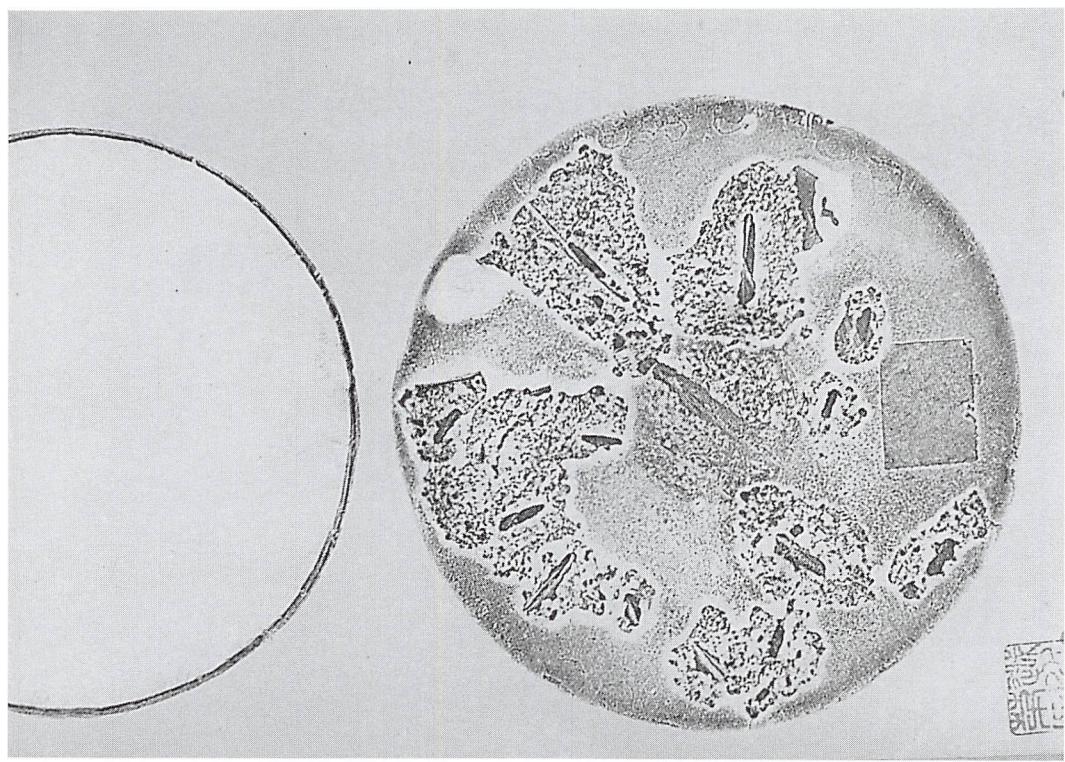


写真15 野本村出土物を観る記（別添え拓本・図）

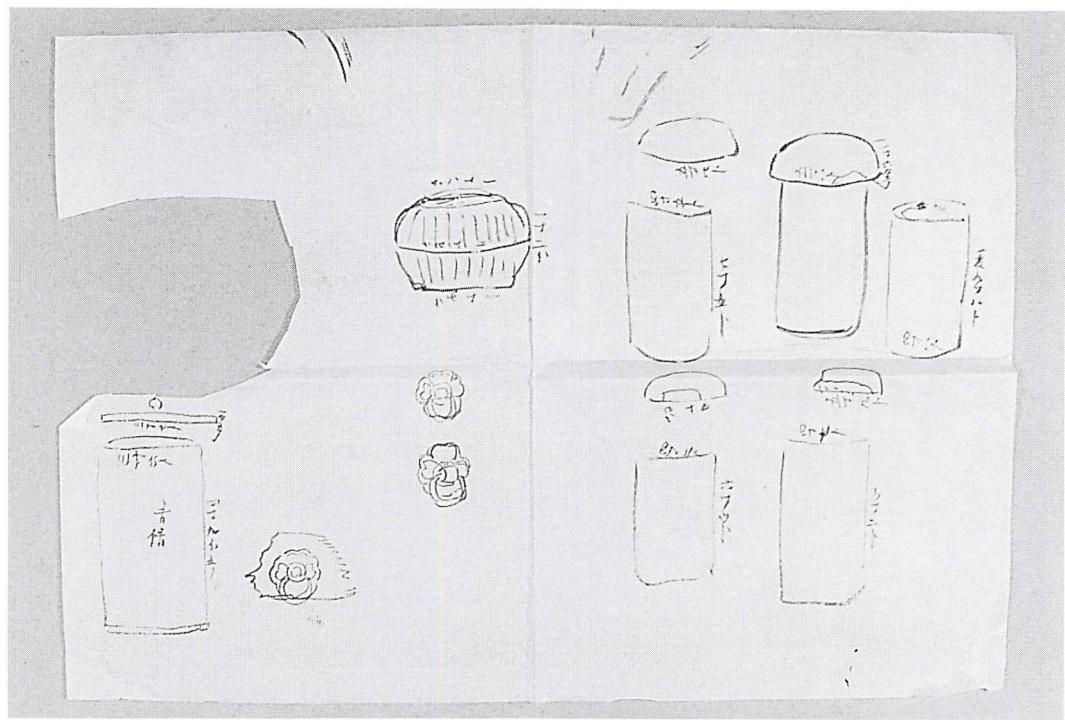
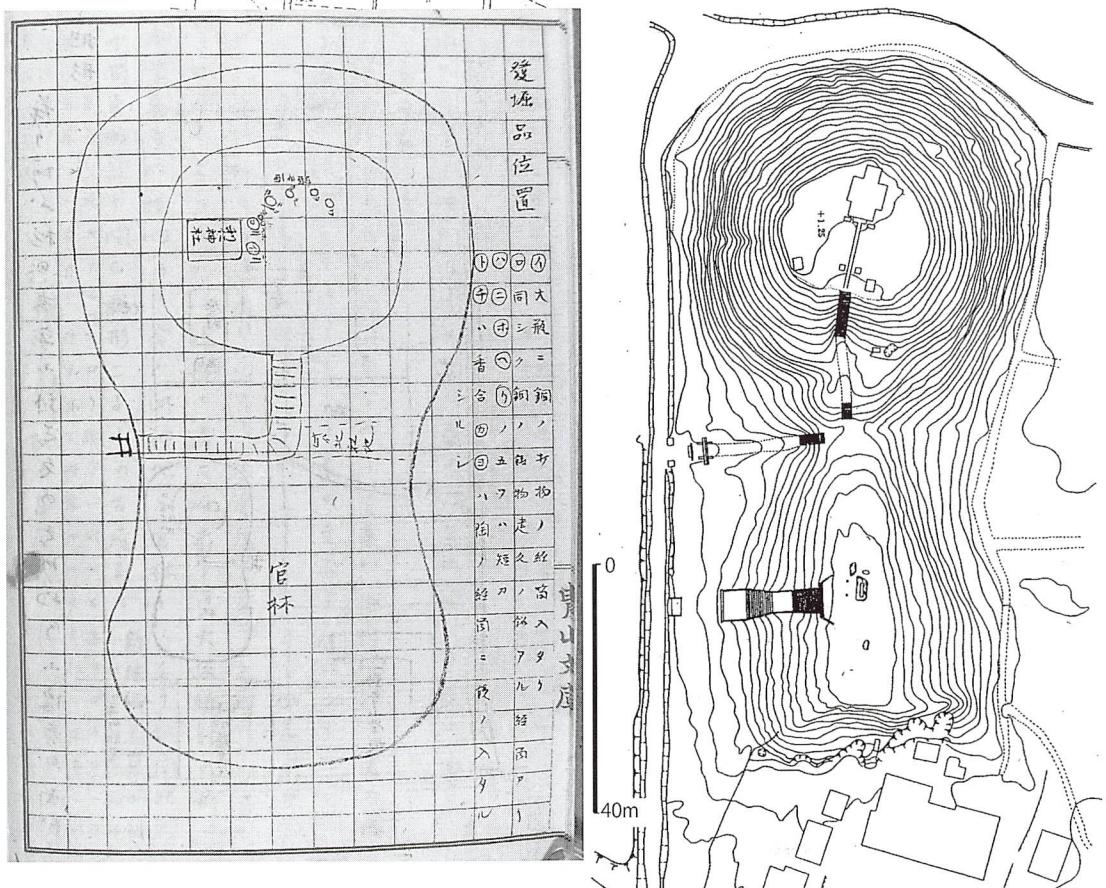
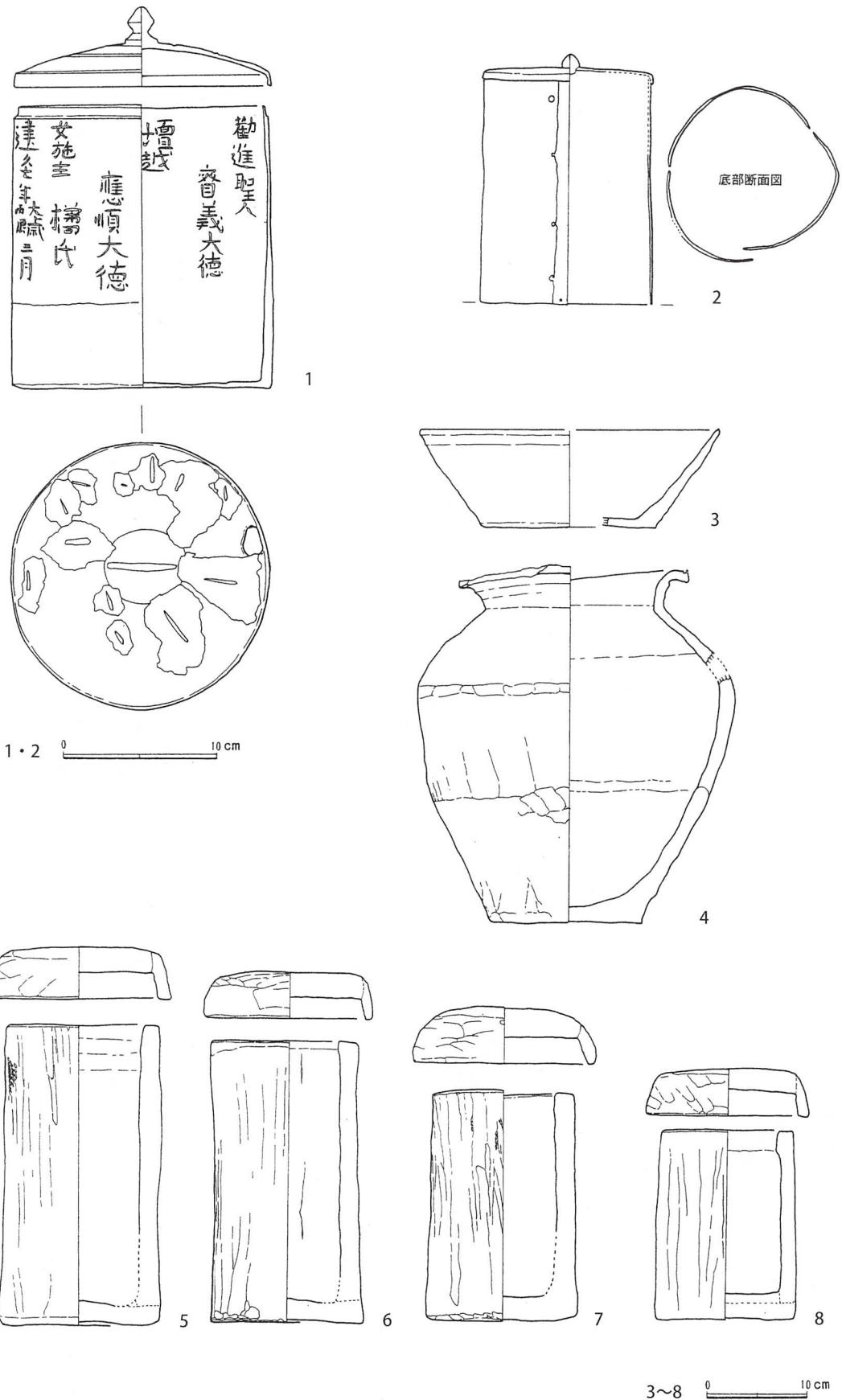


写真16 野本村出土物を観る記（別添え図）



第2図 経筒等の出土位置（左：根岸武香原図、右：現代の測量図 / 金井塚 1979）



第3図 参考資料：利仁神社経塚出土遺物実測図（水口 2010）

# 小学校社会科第6学年の学習におけるさきたま史跡の博物館の役割

向井 隆盛

## 1 はじめに

小学校においては、平成27年度4月から、平成26年度に採択された教科書が使用されている。この機会に、小学校社会科の授業における主たる教材である教科書に掲載された学習内容を分析し、さきたま史跡の博物館で行っている体験学習について考察することが必要であると考える。本稿では、特に当館の調査研究内容と関わりの深い第6学年の社会科の学習内容と、これまでにやってきた当館の実践について考察する。また、埼玉県の子供たちが学習する際に、当館が果たすべき役割について述べる。

## 2 小学校社会科の学習内容とさきたま史跡の博物館の関わり

さきたま史跡の博物館は、国指定史跡埼玉古墳群を中心とする県内の考古資料の収集保管・調査研究・展示公開・普及啓発を使命としている。小学校社会科における第6学年の学習内容では、（1）ア「狩猟・採集や農耕の生活、古墳について調べ、大和朝廷による国土の統一の様子が分かること。その際、神話・伝承を調べ、国の形成に関する考え方などに关心をもつこと。」との関わりが深い。第6学年の社会科の学習では、古墳の規模や出土品、古墳の分布等を調べ、豪族の出現と大和政権による国土の統一の様子を学ぶ。子供たちは、教科書の記述から、豪族は「強い力をもったむらの指導者」であると理解している。しかし、具体的にどのくらいの力をもっていたのか、そもそも指導者とはどんな人なのかということを理解するには、教科書の資料だけで十分とは言えない。そこで、博物館が重要な役割を果たす。大きな前方後円墳の周囲を歩いてその大きさを実感したり、博物館の展示室に陳列された多くの副葬品を見たりすることは、多くの言葉で語るより、子供たちの理解をより深く、豊かなものにする。子供たちは、当博物館を訪れ、様々な体験学習に参加することで、より実感的に古墳がつくられたころの様子について学ぶことができる。身近な地域の歴史から国土の歴史を考えるという点でも、さきたま史跡の博物館は大きな役割を果たしている。そして、その役割を一層果たすためには、教科書に掲載された資料を熟知し、体験学習の企画に反映させていくことが必要である。

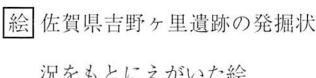
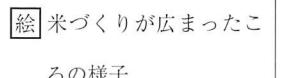
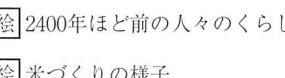
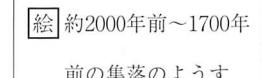
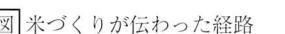
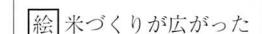
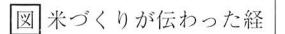
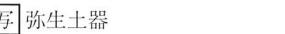
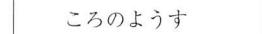
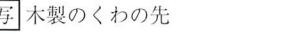
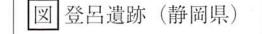
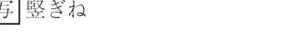
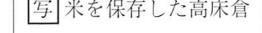
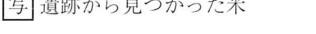
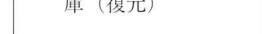
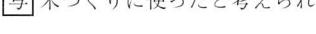
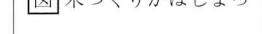
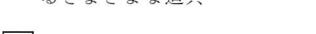
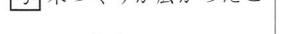
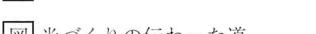
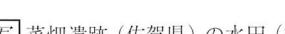
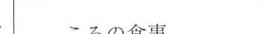
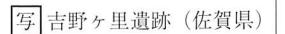
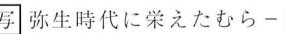
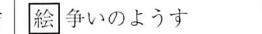
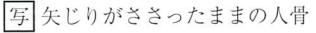
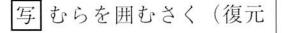
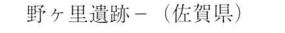
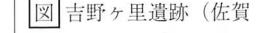
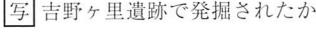
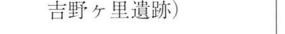
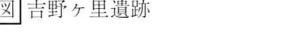
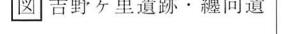
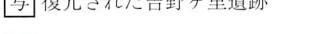
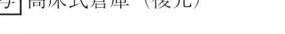
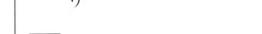
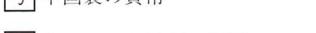
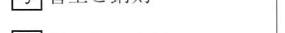
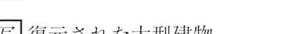
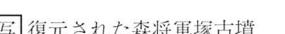
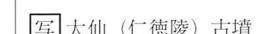
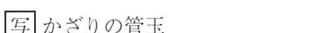
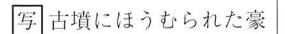
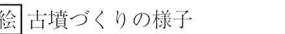
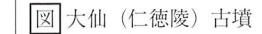
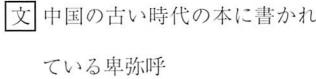
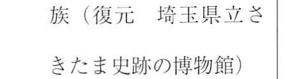
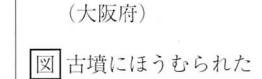
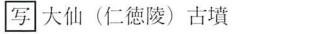
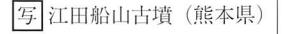
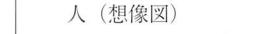
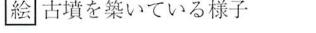
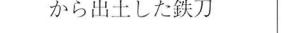
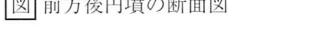
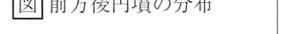
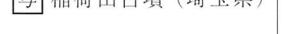
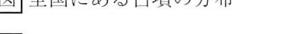
平成26年度に採択された教科書は、平成27年度から平成30年度の4年間に渡って子供たちが使用することとなる。本稿では、埼玉県内の小学校で採択された東京書籍、教育出版、光村図書出版、日本文教出版の4社の教科書の掲載内容について整理する。県内の市町村立小学校の23の採択地区では、東京書籍が22、教育出版が1である<sup>(1)</sup>。国立・私立小学校6校では、東京書籍2、教育出版2、光村図書出版2である。特別支援学校14校では、東京書籍10、日本文教出版3、光村図書1である。県内では、東京書籍の教科書が最も多く採択されている。本稿では掲載された資料に焦点をしづって考察を進めることとする。

### 3 小学校社会科教科書掲載資料の分析

本稿では、県内採択4社の教科書に掲載されている資料を、写真（写）、地図・図版（図）、絵画（絵）、文章（文）、年表（年）に分類して表1にまとめた。資料の表記については、各教科書の表記に従った。また、「さまざま～」など一括掲載になっている資料については、可能な限り一つ一つの資料に分けた。

表1 主な教科書の掲載資料一覧

	東京書籍	教育出版	光村図書出版	日本文教出版
狩 獵 ・ 採 集 の 生 活	<p>写 復元された大型掘立柱建物</p> <p>写 三内丸山遺跡</p> <p>写 復元された大型たて穴住居</p> <p>写 復元されたたて穴住居</p> <p>図 三内丸山遺跡の人々の生活</p> <p>写 土をほるための棒</p> <p>写 まつりに使った道具</p> <p>写 つり針</p> <p>写 針</p> <p>写 木の皮でつくった入れ物</p> <p>写 繩文土器</p> <p>写 静岡県浜松市の蜆塚貝塚</p> <p>絵 青森県三内丸山遺跡の発掘状況をもとにえがいた絵</p>	<p>写 三内丸山遺跡</p> <p>写 繩文土器</p> <p>写 矢じり</p> <p>写 土偶（青森県出土）</p> <p>図 人々の食べ物（縄文時代）</p> <p>絵 狩りや漁をしていたころの様子</p>	<p>絵 1万年ぐらい前の人々の様子</p> <p>写 加曾利貝塚（千葉県）から発掘されたもの</p> <p>写 復元されたクヌギやコナラなどの森</p> <p>写 復元された堅穴住居</p> <p>写 発掘された大昔の道具</p> <p>写 復元された堅穴住居の内部の様子</p> <p>文 学芸員の小澤さんの話</p> <p>写 繩文土器</p> <p>絵 木の実やきのこが採れる季節</p> <p>絵 狩りをする季節</p> <p>図 縄文時代の人々の1年の暮らし</p> <p>写 縄文時代に栄えたむら - 三内丸山遺跡 - （青森県青森市）</p> <p>写 復元された大型掘立柱建物</p> <p>写 約30cmの土偶</p> <p>写 復元された大型堅穴住居と内部の模型</p> <p>写 黒曜石のナイフ</p> <p>写 木の皮で編んだふくろ</p> <p>写 ひすいの玉</p> <p>図 縄文時代の交流</p>	<p>絵 2万年前のようす</p> <p>絵 約5500年前～4000年前の集落のようす</p> <p>写 三内丸山遺跡の復元模型と復元された建物</p> <p>写 さいばいしているくりの林</p> <p>写 堅穴住居群</p> <p>写 高床倉庫群</p> <p>写 大型住居</p> <p>写 大型掘立柱建物</p> <p>写 狩りや漁をしていたころの食事</p> <p>図 三内丸山遺跡（青森県）</p> <p>写 加曾利貝塚（千葉県）</p> <p>写 三内丸山遺跡で出土したかごと中に入っていたくるみ</p>

農耕の生活				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
国土の統一				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				
				

<p>写 ひすい製の勾玉・管玉</p> <p>写 土器・鎌</p> <p>写 朝顔形やつぼ形のはにわ</p> <p>写 復元された石室</p> <p>写 熊本県江田船山古墳から出土した鉄刀</p> <p>写 埼玉県稻荷山古墳から出土した鉄劍</p> <p>文 ワカタケル大王と二つのはなれた地域の古墳</p> <p>写 復元されたのはりがまと新しい土器</p> <p>年 日本の国の成り立ち</p> <p>文 神話に書かれた国の成り立ち</p> <p>写 西谷3号墳（島根県出雲市）の復元模型</p> <p>図 四すみがつき出た古墳の分布</p> <p>写 甲山古墳（滋賀県野洲市）</p> <p>写 岩屋古墳（千葉県栄町）</p> <p>写 森将军塚古墳（長野県千曲川市）</p>	<p>絵 古墳づくりの様子</p>	<p>図 大和地方</p> <p>写 稲荷山古墳（埼玉県）から出土した文字を刻んだ鉄劍</p> <p>写 大陸から伝わった土器</p> <p>写 高松塚古墳（奈良県）の壁画にえがかれた女性</p> <p>写 藤ノ木古墳（奈良県）から出土したくつ（復元）</p> <p>文 神話「ヤマトタケルノミコト」の物語</p> <p>写 古市古墳群</p> <p>写 黒塚で発掘された石室の模型</p>	<p>写 高松塚古墳（奈良県明日香村）のかべにえがかれた女性</p> <p>写 藤ノ木古墳で出土したくつ（復元）</p> <p>図 高松塚古墳（奈良県）藤ノ木古墳（奈良県）</p> <p>写 鉄のよろい・かぶと・刀</p> <p>写 渡来人が伝えた新しい土器</p> <p>文 ヤマトタケルノミコト</p>
---	-------------------	---	---

学習内容「狩猟・採集の生活」では、復元された建物の写真、出土した道具類、食料の資料など衣食住の資料を主に掲載している。当時の人々の一年間の生活を捉えることができる資料としていわゆる縄文カレンダーを合わせて掲載し、児童が当時の生活について具体的に想像できるように配慮されている。学習内容「農耕の生活」では、水田遺構をもつ遺跡の写真や農耕に使われた道具などの出土遺物を主に掲載している。また、当時の生活を描いた絵を掲載し、指導者のもとで集団作業を行う生活のようすを児童が捉えられるように配慮されている。

学習内容「国土の統一」では、争いが生じ、力のある豪族が現れ、やがて大和政権によって国土が統一されていくという流れがわかる資料が掲載されている。その過程において、大陸から渡来人がやってきて様々なものや技術を伝えたことを児童が理解できるよう配慮されている。当館に展示されている国宝「金錯銘鉄劍」や復元された将軍山古墳の石室は、強大な豪族の力を知る手がかりであるとともに、大和朝廷の勢力拡大が分かる資料として扱われている。

つぎに、当博物館と関わりの深い古墳時代を扱った学習内容「国土の統一」について、さらにくわしく分類した。教科書の掲載資料のねらいを考察し、そのねらいごとに資料を分類・整理し表2にまとめた。また、そのねらいと関わりの深い当博物館の展示資料を抽出し、合わせて表に示した。

表2 資料掲載の意義とさきたま史跡の博物館展示資料

	教科書に掲載されている資料	資料掲載のねらい	さきたま史跡の博物館に展示されている資料
生活の変化	<p>写 吉野ヶ里遺跡</p> <p>写 むらを囲むさくなどの復元品</p> <p>写 矢じりがささったままの人骨 ・首のない人骨など</p> <p>写 管玉や銅剣など豪族の力を示すもの</p> <p>文 中国の古い時代の本に書かれている卑弥呼の記述</p>	米づくりの広がりによって、むらとむらとの間で争いが生じたこと、むらの指導者が強い力をもち、豪族となっていましたこと、豪族の中には、まわりのむらを従えてくにをつくり王と呼ばれたことなどを児童に理解させる。	○稻荷山古墳から出土した武器類・馬具類・祭祀の道具など ○形象埴輪
大陸とのつながり	<p>写 銅鐸・銅剣・鉄のよろい・かぶと・刀などの金属製品</p> <p>写 南方の貝でつくった装飾品</p> <p>写 かざりの管玉やガラス玉などの装飾品</p> <p>写 高松塚古墳の壁画や藤ノ木古墳から出土したつつなど、大陸とのつながりを示すもの</p> <p>写 須恵器など渡来人が伝えた新しい土器</p>	朝鮮半島から日本列島にわたって住み着いた渡来人が大勢いたこと、鉄器、青銅器、麻や絹、南方の貝で作った装飾品など進んだ技術や文化が日本にもたらされたことを児童に理解させる。 大和朝廷が、大陸からの文化を積極的に取り入れたことを児童に理解させる。	○国宝「三環鏡」「鈴杏葉」などの銅製の馬具 ○国宝「大刀」「挂甲」などの鉄製品 ○将軍山古墳出土のガラス玉 ○瓦塚古墳や奥の山古墳、中の山古墳の須恵器
豪族や王の出現	<p>写 大仙（仁徳陵）古墳</p> <p>絵 古墳を築いている様子</p> <p>図 前方後円墳の構造図や復元された石室</p> <p>写 ひすい製の勾玉・管玉などの副葬品</p> <p>写 円筒はにわや形象はにわ</p>	大きな力をもった豪族は、技術者や多くの人々を指図して大きな古墳を築いたこと、九州地方から東北地方までの全国に古墳がつくられ、中でも前方後円墳には古いものや大きいものがたくさんあることを児童に理解させる。	○稻荷山古墳・将軍山古墳などの前方後円墳 ○丸墓山や小円墳などの円墳 ○国宝「勾玉」「画文帶環状乳神獸鏡」「龍文透彫帶金具」などの副葬品 ○稻荷山古墳や瓦塚古墳の埴輪 ○将軍山古墳展示館の石室 ○馬形埴輪と馬冑・旗ざお金具
国土の統一	<p>写 熊本県江田船山古墳から出土した鉄刀</p> <p>写 埼玉県稻荷山古墳から出土した鉄劍</p> <p>文 ワカタケル大王と二つのはなれた地域の古墳</p> <p>図 前方後円墳の分布</p> <p>年 日本の国のはり立ち</p> <p>文 神話に書かれた国のはり立ち</p>	近畿地方には大きな力をもった豪族が早くから現れ、その中心となった王は大王と呼ばれたこと、5~6世紀ごろには九州から東北南部までの豪族や王を従えるようになったことを児童に理解させる。	○国宝「金錯銘鉄劍」 ○関東地方の古墳の分布図 ○水鳥形埴輪

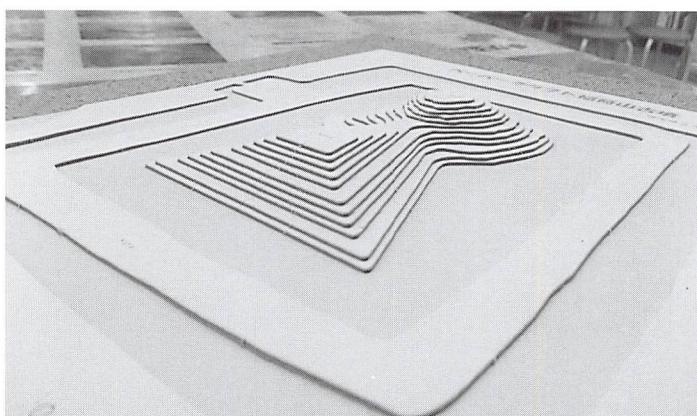
学習内容「国土の統一」に関する教科書掲載資料は、その掲載のねらいから4つに分類することができると言える。「生活の変化」「大陸とのつながり」「豪族や王の出現」「国土の統一」である。この表をもとに、子供たちの博物館での学習場面について考えてみる。例えば、展示室での観覧の場面について考える。当館の展示は古墳ごとに展示物が配置され、国宝展示室入り口から左回りに進むとおよそ時間軸に沿って観覧することができるようになっている。博物館を訪れた子供たちは、当館の配置に沿って観覧することで、一定の学習成果を得ることができる。しかし、教科書に掲載されている学習内容の順序とその掲載のねらいを参考に、学習内容ごとに展示を観覧することで、一層学習効果を高めることができる。そのことを、予め引率する学校職員に資料として提供することで、子供たちの学習効果は一層を高まると考える。

次に、現在行われている当館の体験学習事業について、教科書資料との関連を考える。

#### 4 さきたま史跡の博物館における体験学習と教科書掲載資料の関わり

さきたま史跡の博物館では、これまでにも博学連携を意識した様々な体験学習を行ってきており。それらの体験学習を、教科書に掲載されている学習内容との関係から分類すると、補充と発展の二つに分けて考えることができる。

教科書の内容を補充する体験学習とは、例えば「ペーパークラフト稲荷山古墳」づくりが挙げられる。第6学年の児童は、教科書で古墳について学び、その代表的な形としての「前方後円墳」を知る。また、前方後円墳の全国への分布を調べることで、大和政権が勢力を拡大していくことを理解する。しかし、6年生の児童であっても、前方後円墳を教科書の掲載写真のみから実感的に捉えることは難しい。また、社会科見学などで実際の古墳を見る際にも、どこを見ればよいのか、現地でポイントをつかんで見学するのはなかなか難しい。そこで、古墳の見学前に、ペーパークラフトで1/1000のサイズの稲荷山古墳をつくることは、学習効果を一層高める補充的な学習活動として有効である。児童は、一段一段の古墳のパーツを組み上げることで、その高さを実感する。何度も繰り返して前方部と後円部の形に触れることで、その特徴を認識する。こうして、前方後円墳の形を立体的なイメージとして描けるようになった上で、実際の古墳を見学すると、高さや長さ、くびれている部分や張り出している部分などの形をよく見ることが可能となる。これは、教科書の学習内容をよりよく理解するという点で、補充的な学習であるといえる。



ペーパークラフト稲荷山古墳

縮尺 1/1000

一段の紙の厚みは 1 mm である。

1 mm は実際の 1 m を表している。

現在、特に解説の資料はつけられていないが、みどころを示すことで、大変よい教材となる可能性がある。

教科書の内容を発展させた体験学習とは、例えば「夏休み子供講座『キミも古墳博士』」で行っている「拓本取り」や「土器洗い」が挙げられる。次期学習指導要領の改訂において、能動的な学びとして期待されるアクティブラーニングの主な学習方法として、問題解決的な学習が挙げられる。その学習デザインの根幹となる考え方の一つは、学習者に専門分野の研究者の思考を追体験をさせるということである。歴史の学習における古代の内容の多くは、考古学を基礎学問として成り立っている。考古学とは、人類が残した遺物・遺構などの痕跡から人類の活動や変化を知る学問であるといえる。本物の遺物に触れ、古代の人々の活動の痕跡をよく見て考えるという方法を追体験することは、児童にとって「物を見て考える」とはどういうことなのかを考える機会となる。教科書に掲載された資料による学習は考古学の成果を基にしているが、考古学の研究方法の追体験は、学習者の思考方法を広げるという意味において発展的な学習であるといえる。

### 拓本づくり

夏休み子供講座に参加した子供たちは、倉澤学芸員の指導のもと、拓本づくりを行った。拓本を探ることで埴輪の破片をよりよく見ることができ、そこに浮き出た文様は何であるのか、興味をもって観察することができた。



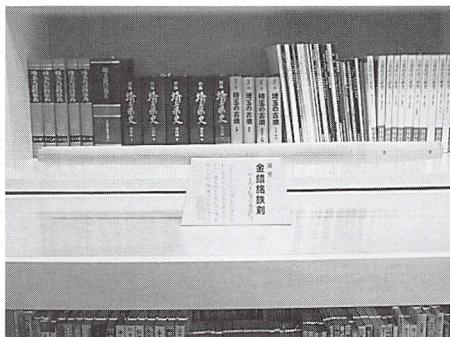
### 土器洗い

土器洗い体験では、子供たちは、ブラシを使って、埴輪のパーツについた土を一つ一つ丁寧に落とした。土を落としながら、文様の違いや、粘土の色の違いなどに気づくことができた。物をよく見て考えることを通して、考古学的な思考の基本について体験することができた。

現在当館で行われている補充的な体験学習と発展手的な体験学習の実践例を挙げる。

#### 【補充的な学習活動の実践例】

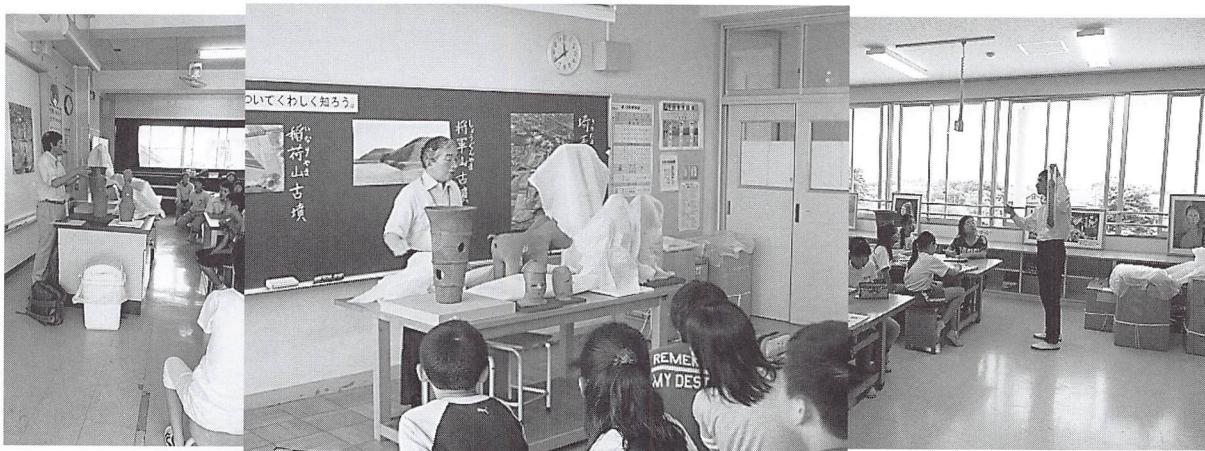
##### ○金錯銘鉄剣のレプリカづくり



金錯銘鉄剣のペーパーレプリカ

当館では、金錯銘鉄剣のペーパーレプリカを販売している。このレプリカを作ることで、児童は、鉄剣の大きさや形を理解したり、刻まれている文字をよく見たりすることができる。また、復元品のレプリカであるため、鉄剣がつくられた当時の様子がわかるようになっている。教科書掲載の写真と並べることで、この鉄剣を所持していた当時の豪族の姿をイメージしやすくなる点で補充的な学習のための教材であるといえる。

##### ○出前授業「なるほど古墳時代」（展開部）



毎年6月から7月にかけて行っている出前授業「なるほど古墳時代」は、学芸員が直接子どもたちに話をしたり、質問に答えたりすること、本物の遺物を間近で見たり、さわったりできることができ大きな柱となっている。また、中心となる教材としては、教科書に掲載されている遺物の中から、古墳時代を最も象徴すると考えられる埴輪を用いている。

この授業の展開部（中心的な学習活動）においては、児童が埴輪を観察し、その埴輪が何を表現しているのか、なぜ古墳に立てられたのかということを、埴輪を観察しながら考える。本稿で分析した4社の教科書には、埴輪の写真が掲載されている。しかし、埴輪についてはわからないことも多く、それが何のために作られたのか、そもそも埴輪とは何かということは記載されていない。そこで、実際に埴輪を見ながら「埴輪とは何か」ということを考える学芸員の姿を見てもらうことで、児童一人ひとりが埴輪は何かを考える機会としている。また、水鳥の埴輪について考えるときには、どの教科書にも掲載されている「ヤマトタケル」の逸話に触れるなど、教科書と観察の往還の中で、埴輪について実感的に捉えることができるよう工夫している。これは、教科書のブッキッシュな知識を、生きて働く知識として捉えられるように仕組んだ補充的な学習である。

## ○さきたま秋祭り「館内オリエンテーリング」



当館では、毎年11月14日の県民の日に合わせて「さきたま秋祭り」を開催している。その中のイベントの一つとして、問題を解きながら館内を巡る「館内オリエンテーリング」を行っている。このイベントには多くの子供たちが参加するため、子供たちにぜひ見て欲しい展示物を選んで、問題を作成している。

例えば、金錯銘鉄剣や馬冑など、古墳の副葬品の中から、代表的な物を選んだ。教科書には多くの副葬品の写真が掲載されており、古墳に葬られた豪族の力の大きさがわかるようになっている。ここでは、実際の副葬品を見ることで、豪族の力の大きさを実感的に捉えられるようになることがねらいである。これは、実物を間近に見ることで、教科書の学習内容を補う補充的な学習であるといえる。

**かんない  
館内オリエンテーリングの問題**

8 このもんだいにこたえて、かくされた「ことば」をさがしだそう。  
もんだいのこたえはすべてはくぶつかんのなかにあります。

①受付に置いてある道具は、「おこし」に使われる。  
②企画展示室にある「かわら」に描かれている花は、「OOO」である。

③国宝展示室の真ん中にあるのは、「OOO OOOでっけん」である。

④企画展示室に3つある古墳の模型の真ん中は、「OOOO古墳」である。

⑤国宝展示室の緑色の首飾りは、「OOO玉」である。

⑥受付に置いてある「はにわ」の写真は、「OOOOびと」である。

⑦国宝展示室にあるこの「かぶと」は、「OO」のかぶる「かぶと」である。

⑧さきたま体験工房で行われるが玉づくりで、まが玉といっしょにくびかざりにかけるのは、「OOOO」である。

**かんない  
館内オリエンテーリング 解答用紙**

**博物館マップ**

1 受付 2 入口 3 2階講堂 4 3階展示室 5 トイレ 6 3階展示室 7 1階展示室 8 2階展示室

もんだいのこたえは、それぞれのすうじがかれたらしょにあります。

こたえは、「ひらがな」でよこにかいてね。ふとわくのなかをたてによむと、かくされた「ことば」がみつかるよ。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

もんだいはうらにあります。

館内オリエンテーリングの問題用紙

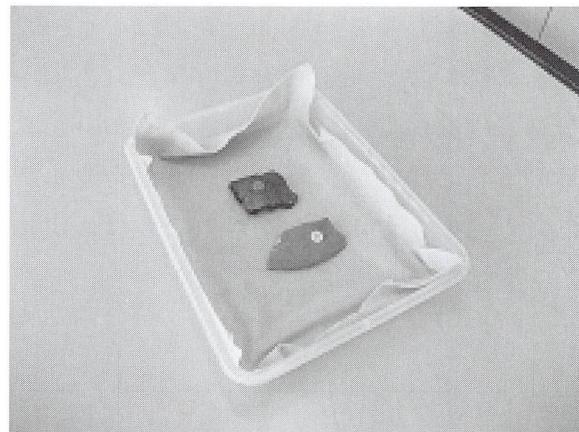
## 【発展的な学習活動の実践例】

### ○出前授業「なるほど古墳時代」（導入部）

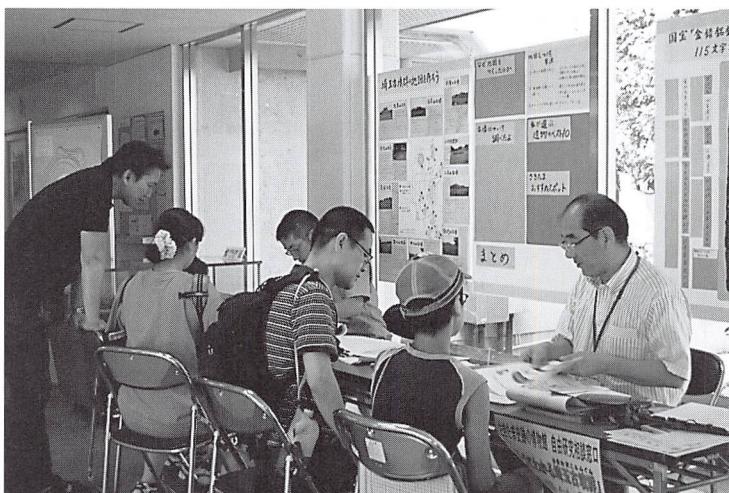


児童は、自らの考え方についての評価を受けることで、物を見て考えることはどういうことなのかを理解することができる。導入で体験した考え方は、展開部で埴輪を観察する際にも繰り返し用いるよう授業を構成している。これは、歴史学習のはじめにおいて、歴史の学習の仕方の一つを身に着けるための発展的な学習である。

出前授業「なるほど古墳時代」の導入部（授業の冒頭）では、土器片を比較して、どちらが古いかを考える活動を行っている。児童は、縄文土器と須恵器とを比べ、教科書から得た知識を使ってグループで話し合いながら思考を深めていく。授業者は、各グループを机間指導しながら、児童の主な発言を収集し、全体の話し合いの場面で取り上げて評価する。



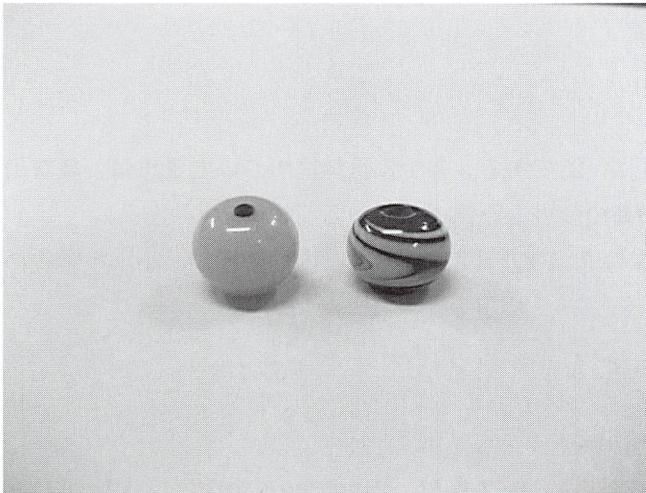
### ○夏休み自由研究相談窓口



夏休み自由研究相談窓口は、平成26年度より7月の終わりから8月の初めの3日間程度行っている事業である。夏休み中に行う自由研究の一つとして、埼玉古墳群の研究を提案している。中でも取組例の一つとして例示している「埼玉古墳群の地図をつくろう」では、さきたま古墳公園を楽しく散策し、博物館の展示物を観覧する

ことで情報を集め、地図上に知識を構成する仕組みになっている。自由研究は本来楽しみながら行う学習であり、楽しむということを念頭に置いて企画されたこの取組例は、児童の能動的な学習を促すことをねらっている。これは、児童の学習意欲を高め、知識を地図上に構成することで、关心・意欲と知識・理解の両面を伸ばす発展的な学習である。

## ○ガラス玉づくり



当館では、平成25年度より毎年2月に、「ガラス玉づくり」の体験学習を行っている。ガラス玉は教科書に写真が掲載されており、古墳の代表的な副葬品として、豪族の力を示す資料となっている。児童は、千年以上前の人々が、ガラスを使っていたことに強い興味を示す。

この体験学習では、ガラスが大陸から伝わってきたことを知らせる。教科書の学習内容である大陸とのつながりについて、補充的な学習を行うことができる。

続けて、古代から行われてきたとされる巻きつけの技法で、ガラス玉を作成する。児童は、ガラスをどのように加工したのか実感として理解するとともに、古代のガラスづくりに興味を広げていく。これは、児童の学習意欲を高め、古墳が築かれたころの人々のくらしへの興味を高めていく発展的な学習であるといえる。

## 5 さきたま史跡の博物館における博学連携の取組の展望

当館でこれまでに行ってきた体験学習は、教科書に掲載された資料との関わりも強く、小・中学校で行われている社会科の授業の補充・発展として高い学習効果があると考える。埼玉県を特徴づける史跡でもあり、埼玉県の郷土の学習を行う上でも教育効果が期待される。しかし、これまで、社会科の学習内容のどの部分とどのように関わっていくのかという系統性を意識した開発の面が弱かった。学校教育との相互の位置関係を再度整理し、学習内容面での具体的な関連を示していくことが必要であると考える。また、現在、さきたま史跡の博物館では、学校団体に対して、展示室や古墳群を巡って解説することは行っていない。引率の学校職員が、それぞれの展示物や古墳などの特徴を理解し、その指導のもとで児童が見学できるようにすることが望ましい。そのための支援は、博物館の使命であると考える。本年度、学習支援の事業として、教員を対象とした「小・中学校の先生必見！博物館活用講座『授業で使える考古学』」を開講した。この取組は、過去にもなされていたことがあり<sup>(2)</sup>、その流れを引き継ぐものである。

## 6 おわりに

本稿では、教科書に掲載されている資料を切り口として、博物館の役割について考察してきた。博物館を訪れる子供たちに対して、博物館職員と引率の学校職員とがそれぞれの職の特性を生かして働きかけていくことで、子供たちの学習効果は高まっていく。博物館の役割の1つは、引率の学校職員がポイントをつかんで児童の指導に当たれるよう、事前に資料を用意し、博物館での学習方法のデザインを提案していくところにあると考える。その際、子供たちにとって最も身近な教材である教科書に掲載されている資料は、博物館と学校のそれぞれの共通の土

台として、検討の手がかりとなる。今後も、機会を捉え、教科書掲載の資料について、整理・分析を続けていくことが必要である。

#### 【註】

- (1) 平成27年度現在における埼玉県の教科書採択地区は、23である。第1採択地区のさいたま市は、教育出版の教科書を採択している。他22地区は、東京書籍の教科書を採択している。
- (2) 平成12年度に、博学連携の取組として「さきたまアカデミア」が実施され、県内の博物館、小・中学校の職員が集まり、意見交換がなされた。

#### 【参考文献】

- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説社会編』 東洋館出版社 平成20年8月31日  
北俊夫・小原友行・吉田伸之他著 『新編新しい社会6年上』 東京書籍 平成27年2月10日  
有田和正・石弘光監修 『小学社会6上』 教育出版 平成27年1月20日  
石毛直道他著 『社会6』 光村図書出版 平成27年2月5日  
池野範男・的場正美・安野功他著 『小学社会6年上』 日本文教出版 平成27年2月9日  
埼玉県立さきたま史跡の博物館 『調査研究報告第14号』 平成13年3月  
埼玉県立さきたま史跡の博物館 『ガイドブックさきたま』 平成27年1月

## 埼玉古墳群をめぐる研究者たち

井上 尚明

2015年4月以降、埼玉県の考古学研究者が相次いで逝去された。4月7日に栗原文蔵さん、6月12日に駒宮史郎さん、そして6月18日には金井塚良一さんが亡くなられた。3人ともにさきたま資料館（現在のさきたま史跡の博物館）に在籍されたことがあり、埼玉古墳群に関する論文や報告書を多数執筆されている方々である。

これまでにも、柳田敏司さんや小川良祐さん・増田逸朗さんといった、埼玉古墳群の保護やさきたま資料館建設に尽力され、埼玉古墳群研究の基礎を築いた先輩たちが逝去されているが、新年度になってすぐに届いた、立て続けの訃報に少なからず衝撃を受けた。

吉見百穴の研究で知られる金井塚さんであるが、退職されてからもバイタリティー溢れる研究を続けられた。埼玉古墳群に関しては多くの文章を残しておられるが、『馬冑が来た道』では將軍山古墳出土の馬冑をテーマに、中国や朝鮮半島の資料をも駆使したダイナミックな論展開している。昭和60年度から63年度まで、館長として瓦塚古墳の調査などを指揮されるとともに、多くの論文などを発表している。



写真1：昭和60年4月14日（日）の入館者200万人目の記念撮影。金井塚さんの隣は当時副館長であった横川さん。

金井塚さんとは県立博物館（現在の歴史と民俗の博物館）の館長時代に、学芸員として御一緒したことがあるが、随分とわがままを言って埋蔵文化財調査事業団に異動させていただいた記憶がある。その後も時々博物館や遺跡などでお会いすることはあったが、世間話や仕事の話はしたことがなかった。私の専門ではない古墳時代の話題が専らであったが、思いついたように今何を書いているかなどを聞かれることもあり、研究者としての付き合いをして頂いたように思う。

行田の出身である栗原さんは、埼玉県が採用した学芸員第1号であり、私が埼玉県教育局に就職した当時の直属の上司としてもお世話になった。昭和43年の稻荷山古墳の礫榔の発掘調査に参加され、昭和48年度にはさきたま資料館の学芸課長として稻荷山古墳の周堀の調査を担当されている。



写真2：昭和42年11月に撮影された写真：最前列の栗原さんのほかに、増田さん・駒宮さん・今泉さんが一緒に写っている。古墳の大きさから、奥の山古墳か？

栗原さん独特の口調で、上下関係なく正論を貫く姿は、多くの同僚や後輩たちの印象に残っていると思うが、「埼玉のご意見番」として貴重な存在でもあった。栗原さんの部下であった時に、夕方出張から県庁に戻ったところ、「この時間に戻るなら、博物館か遺跡でも見てくるように」と言わされたことがある。その後、この言葉どおりに多くの遺跡に行き、県内の大部分の博物館や資料館を見る機会を得ることができた。このことは、その後の研究や仕事にも大いに

役立ち、私が部下を持った時には、栗原さんと同じような台詞を言いたいと思ったものである。

県庁に入るまでは、栗原さんと面識はなかったが、私の恩師である稻生典太郎先生とも懇意であったため、初対面の時に先生から話は聞いていると告げられ、急に身近に感じたことを覚えている。もう、30数年前のことである。

駒宮さんとは、栗原係長のもと教育局文化財保護課第2係（当時）の職員として、現場の立ち会いや調整・試掘、さらに私生活でも多くの時間を一緒にさせていただいた。埼玉の地形・土地勘や遺跡に関する知識の基礎は、駒宮さんとの時間で養われたといっても過言ではない。学生時代には、報告書などで最も多く目にした埼玉の研究者は駒宮さんであり、その駒宮さんと机を並べることになった時には大いに緊張した。しかし、気さくな人柄とユーモアで、その後30年以上お付き合いいただいた。



写真3：まが玉作りで子供たちに作り方を説明している写真（平成17年10月撮影）。

埼玉古墳群の調査に関しては、学生時代から参加されており、県に就職後も昭和63年に戸場口山古墳の調査を担当し、その後平成16年度から18年度まで副館長として、稻荷山古墳の前方部復元整備などの指導をされた。私がはじめてさきたま史跡の博物館に異動してきた時の副館長で、久しぶりに一緒に仕事ができ、整備計画策定などでバックアップいただいた。

埼玉古墳群と関わりの深い、3人の先輩たちが同じ年に相次いで亡くなられたが、特に一番若く、亡くなる1週間ほど前にお会いしたばかりの駒宮さんの訃報を聞いた時には、何かの間違いではないかと思ったほどである。この文章と並行して製鉄遺跡についての原稿を書いていたが、駒宮さんが執筆された『甘粕山』の炭焼窯跡の考察を読んで、その緻密さや先見性に驚かされ、良質な報告書や考察は何年経過しても色あせないことをあらためて教えられた。

埼玉古墳群の近くにお住まい、「時々来るよ」といっていた姿が忘れられない。

埼玉県の学芸員の中で、金井塚さん・栗原さん・駒宮さんの3人を知り、一緒に仕事をしたことのある者はほとんどいなくなってしまった。しかし、多くの著作・論文・報告書にはそれぞれの業績が残されており、消えることはない。3人が長い時間をかけて調査し研究してきたことは、これからも埼玉古墳群の研究や整備に生かされ、執筆された文章は多くの研究者に引用され続けるに違いない。埼玉古墳群の調査や整備に関わる者、あるいはこれから携わる者は、先学の意志や研究を引き継ぎ、そして乗り越える努力を惜しまないでほしい。それこそが3人の研究者への追悼にほかならない。

あらためて3人のご冥福を祈りたい。

金井塚良一 2008 『馬冴の来た道』 吉川弘文館

北武藏古代文化研究会 2004 『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集－』

関義則 2013 「さきたま風土記の丘整備事業と柳田敏司氏」『埼玉県立史跡の博物館紀要第6号』

## **埼玉県立史跡の博物館紀要 第 9 号**

---

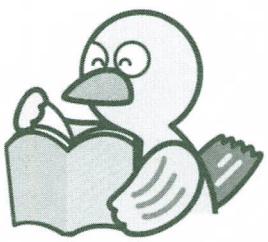
平成28年3月28日 発行

発行 埼玉県立さきたま史跡の博物館  
〒361-0025 埼玉県行田市大字埼玉4834  
TEL048-559-1111

埼玉県立嵐山史跡の博物館  
〒355-0221 埼玉県比企郡嵐山町菅谷757  
TEL0493-62-5896

印刷 巧和工芸印刷株式会社  
〒333-0842 埼玉県川口市前川3-25-3

---



埼玉県のマスコット  
コバトン